

基本計画書

基本計画									
事項		記入欄						備考	
計画の区分		学部・学科の設置							
フリガナ 設置者		ガッコウホウジン アイチダイガク 学校法人 愛知大学							
フリガナ 大学の名称		アイチダイガク 愛知大学 (Aichi University)							
大学本部の位置		愛知県豊橋市町畑町字町畑1番地の1							
大学の目的		本大学は、教育基本法及び学校教育法並びに本学の設立趣意書に基づき、高い教養と専門的職能教育を施し、広く国際的視野をもって人類社会の発展に貢献しうる人材を養成することを目的とする。							
新設学部等の目的		日本語の歴史的成り立ちや特色について学び、それを基点として日本文学や日本語表現学について深く思考することを通じて、日本文化を世界的視野の中で相対化しつつ捉え返すスキルを涵養する。その成果の上に立ち、これから様々な形で直面することとなる日本文化の問題点を敏感に察知し、時に批判的に、時に柔軟に受容していく知性を備えた人材を養成する。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	開設時期及 び開設年次	所在地	令和2年4月 設置届出予定
	文学部 (Faculty of Letters)	年	人	年次 人	人	学士 (文学)	令和3年4月 第1年次	愛知県豊橋市町畑町 字町畑1番地の1	
	日本語日本文学科 (Department of Japanese Language and Literature)	4	48	—	192	(Bachelor of Arts in Humanities)			
	歴史地理学科 (Department of History and Geography)	4	70	—	280	学士 (文学)	令和3年4月 第1年次	愛知県豊橋市町畑町 字町畑1番地の1	
計									
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)		令和3年4月 収容定員変更（手続きは省略） 文学部 人文社会学科〔定員減〕 (△118) (令和3年4月) 歴史地理学科〔定員増〕 (70) (令和2年4月設置届出予定)							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数					卒業要件単位数		
		講義	演習	実験・実習	計				
文学部 日本語日本文学科		199 科目	31 科目	2 科目	232 科目	124 単位			
教員組	学部等の名称		専任教員等						兼任 教員等
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	
	新設 分	文学部 日本語日本文学科	5 (5)	0 (0)	— (—)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	134 (142)
		文学部 歴史地理学科	5 (5)	2 (2)	— (—)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	143 (152)
		計	10 (10)	2 (2)	— (—)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	277 (294)
	既	文学部 人文社会学科	11 (11)	7 (7)	— (—)	1 (5)	19 (23)	0 (0)	89 (89)
		心理学科	5 (6)	1 (1)	— (—)	1 (2)	7 (9)	0 (0)	34 (34)
経済学部 経済学科		19 (20)	9 (9)	— (—)	1 (1)	29 (30)	0 (0)	45 (45)	

概 要 の 組 織	設 分	国際コミュニケーション学部 英語学科		6 (6)	4 (4)	— (—)	3 (5)	13 (15)	0 (0)	51 (51)
		国際教養学科		8 (9)	5 (5)	— (—)	2 (3)	15 (17)	0 (0)	48 (48)
		法学部 法学科		14 (15)	11 (11)	— (—)	2 (2)	27 (28)	0 (0)	48 (48)
		経営学部 経営学科		10 (12)	5 (5)	— (—)	1 (1)	16 (18)	0 (0)	57 (57)
		会計ファイナンス学科		10 (11)	5 (6)	— (—)	0 (1)	15 (18)	0 (0)	27 (27)
		現代中国学部 現代中国学科		12 (15)	5 (5)	— (—)	1 (1)	18 (21)	0 (0)	37 (37)
		地域政策学部 地域政策学科		13 (17)	5 (5)	— (—)	3 (3)	21 (25)	0 (0)	41 (41)
		語学教育研究室		0 (0)	0 (0)	— (—)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	— (—)
		共通教育科目等		— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	318 (318)
		計		108 (122)	57 (58)	— (—)	17 (26)	182 (206)	0 (0)	— (—)
		合 計		118 (132)	59 (60)	— (—)	17 (26)	194 (218)	0 (0)	— (—)
教 員 以 外 の 職 員 の 概 要	職 種		専 任		兼 任		計			
	事 務 職 員		132 (132)		123 (123)		254 (254)			
	技 術 職 員		4 (4)		5 (5)		9 (9)			
	図 書 館 専 門 職 員		12 (12)		17 (17)		29 (29)			
	そ の 他 の 職 員		0 (0)		80 (80)		80 (80)			
	計		148 (148)		225 (225)		372 (372)			
校 地 等	区 分	専 用	共 用		共用する他の 学校等の専用		計			
	校 舎 敷 地	21,698 m ²	96,750 m ²		0 m ²		118,448 m ²			
	運 動 場 用 地	27,199 m ²	72,846 m ²		0 m ²		100,045 m ²			
	小 計	48,897 m ²	169,596 m ²		0 m ²		218,493 m ²			
	そ の 他	2,128 m ²	8,787 m ²		0 m ²		10,915 m ²			
	合 計	51,025 m ²	178,383 m ²		0 m ²		229,408 m ²			
校 舎		専 用	共 用		共用する他の 学校等の専用		計			
		99,160 m ² (99,160 m ²)	29,599 m ² (29,599 m ²)		0 m ² (0 m ²)		128,759 m ² (128,759 m ²)			
教室等	講義室	演習室	実験実習室		情報処理学習施設		語学学習施設			
	122 室	85 室	23 室		19 室 (補助職員 15人)		7 室 (補助職員 5人)			
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称				室 数				
		文学部 日本語日本文学科				5 室				
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点			
	文学部 日本語日本文学科	29,895 [389] (29,895 [389])	176 [0] (176 [0])	0 [0] (0 [0])	82 (82)	23,281 (23,281)	16 (16)			
	計	29,895 [389] (29,895 [389])	176 [0] (176 [0])	0 [0] (0 [0])	82 (82)	23,281 (23,281)	16 (16)			
図 書 館		面積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数				
		12,783 m ²		1,745		1,252,335				
体 育 館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要						
		7,175.63 m ²		テニスコート7面、プール1面、ゴルフ練習場1面、弓道場						

経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	共同研究費等は大学全体	
		教員1人当り研究費等		500千円	500千円	500千円	500千円	—	—		
		共同研究費等		11,330千円	11,330千円	11,330千円	11,330千円	—	—		
		図書購入費	1,026千円	1,062千円	1,062千円	1,062千円	1,062千円	—	—		
		設備購入費	2,816千円	2,981千円	2,981千円	2,981千円	2,981千円	—	—		
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
			1,140千円	950千円	960千円	970千円	— 千円	— 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要				私立大学等経常費補助金、雑収入等							
既設大学等の状況	大 学 の 名 称		愛知大学								平成30年度入学定員減（△55人） 平成30年度設置届出（定員55人） 平成30年4月名称変更
	学 部 等 の 名 称		修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所 在 地	
	文学部		年	人	年次人	人		倍			
	人文社会学科		4	290	—	1,215	学士(文学) 学士(社会学)	1.20	平成17年度	愛知県豊橋市町畑町字町畑1番地の1	
	心理学科		4	55	—	165	学士(心理学)	0.64	平成30年度	同上	
	経済学部										
	経済学科		4	330	—	1,320	学士(経済学)	1.14	平成元年度	愛知県名古屋市中村区平池町4丁目60番6	
	国際コミュニケーション学部										
	英語学科		4	115	—	460	学士(外国語)	1.13	平成10年度	同上	
	国際教養学科		4	115	—	460	学士(国際教養学)	1.12	平成10年度	同上	
	法学部										
	法学科		4	315	—	1,260	学士(法学)	1.13	平成元年度	同上	
	経営学部										
	経営学科		4	250	—	1,000	学士(経営学)	1.12	平成元年度	同上	
会計ファイナンス学科		4	125	—	500	学士(経営学)	1.18	平成元年度	同上		
現代中国学部											
現代中国学科		4	180	—	720	学士(現代中国学)	1.13	平成9年度	同上		
地域政策学部											
地域政策学科		4	220	—	880	学士(地域政策学)	1.17	平成23年度	愛知県豊橋市町畑町字町畑1番地の1		
大 学 の 名 称		愛知大学大学院									
学 部 等 の 名 称		修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所 在 地		
法学研究科		年	人	年次人	人		倍				
公法学専攻 博士後期課程		3	3	—	9	博士(法学)	0.00	平成13年度	愛知県名古屋市中村区平池町4丁目60番6		
私法学専攻 博士後期課程		3	5	—	15	博士(法学)	0.00	昭和38年度	同上		

経済学研究科	経済学専攻 博士前期課程 (修士課程)	2	15	—	30	修士(経済学)	0.00	昭和28 年度	同上	令和元年12月届出 (△10人)
	経済学専攻 博士後期課程	3	5	—	15	博士(経済学)	0.00	昭和53 年度	同上	
	経営学研究科									
	経営学専攻 博士前期課程 (修士課程)	2	15	—	30	修士(経営学)	0.43	昭和52 年度	同上	
	経営学専攻 博士後期課程	3	5	—	15	博士(経営学)	0.00	昭和54 年度	同上	
	中国研究科									
	中国研究専攻 博士前期課程 (修士課程)	2	15	—	30	修士(中国研究)	0.53	平成3年 度	同上	
	中国研究専攻 博士後期課程	3	15	—	45	博士(中国研究)	0.59	平成6年 度	同上	
	国際コミュニケーション研究科									
	国際コミュニケーション専攻 修士課程	2	15	—	30	修士(国際コミュニケーション)	0.23	平成14 年度	同上	
	文学研究科									
	日本文化専攻 博士前期課程 (修士課程)	2	10	—	20	修士(日本文化)	0.20	平成3年 度	愛知県豊橋市町畑 町字町畑1番地の1	
	日本文化専攻 博士後期課程	3	2	—	6	博士(日本文化)	0.00	平成6年 度	同上	
	地域社会システム専攻 博士前期課程	2	10	—	20	修士(地域社会システム)	0.00	平成3年 度	同上	
	地域社会システム専攻 博士後期課程	3	2	—	6	博士(地域社会システム)	0.00	平成5年 度	同上	
	欧米文化専攻 博士前期課程 (修士課程)	2	10	—	20	修士(欧米文化)	0.00	平成3年 度	同上	
	欧米文化専攻 博士後期課程	3	2	—	6	博士(欧米文化)	0.00	平成6年 度	同上	
	法務研究科									
	法務専攻 専門職学位課程	3	20	—	60	法務博士(専門職)	0.40	平成16 年度	愛知県名古屋市東 区筒井二丁目10番 31号	
大 学 の 名 称		愛知大学短期大学部								
学 部 等 の 名 称		修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定 員 超過率	開設 年度	所 在 地	
ライフデザイン総合 学科		年	人	年次 人	人	短期大学士 (ライフデザイン総合)	倍			
ライフデザイン総合 学科		2	100	—	200	短期大学士 (ライフデザイン総合)	1.21	平成17 年度	愛知県豊橋市町畑 町字町畑1番地の1	
附属施設の概要										

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学又は高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「—」又は「該当なし」と記入すること。

教育課程等の概要														
(文学部 日本語日本文学科)														
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
共通教育科目	英語	Communicative English I	1前	1		○								兼4
		Communicative English II	1後	1		○								兼4
		Reading I	1前	1		○								兼5
		TOEIC	1後	1		○								兼5
		Practical English I	2前	1		○								兼7
		Practical English II	2後	1		○								兼7
		Reading II	2前	1		○								兼8
		Reading III	2後	1		○								兼8
		Current English I	2前	2		○								兼1
		Current English II	2後	2		○								兼1
		Communication Skills I	1・2・3・4	2		○								兼2
		Communication Skills II	1・2・3・4	2		○								兼2
		Communication Skills III	1・2・3・4	2		○								兼1
		Communication Skills IV	1・2・3・4	2		○								兼1
	中国語	入門中国語 I	1前	1		○								兼5
		入門中国語 II	1後	1		○								兼5
		基礎中国語 I	1前	1		○								兼5
		基礎中国語 II	1後	1		○								兼5
		応用中国語 I	2前	1		○								兼4
		応用中国語 II	2後	1		○								兼4
		総合中国語 I	2前	1		○								兼1
		総合中国語 II	2後	1		○								兼1
		中国語会話（初級） I	1前	1		○								兼1
		中国語会話（初級） II	1後	1		○								兼1
		中国語会話（中級） I	2前	1		○								兼1
		中国語会話（中級） II	2後	1		○								兼1
		コミュニケーション中国語 I A	3前	2		○								兼1
		コミュニケーション中国語 I B	3後	2		○								兼1
	フランス語	入門フランス語 I	1前	1		○								兼1
		入門フランス語 II	1後	1		○								兼1
		基礎フランス語 I	1前	1		○								兼2
		基礎フランス語 II	1後	1		○								兼2
		応用フランス語 I	2前	1		○								兼2
		応用フランス語 II	2後	1		○								兼2
		総合フランス語 I	2前	1		○								兼1
		総合フランス語 II	2後	1		○								兼1
		フランス語会話（初級） I	1前	1		○								兼1
		フランス語会話（初級） II	1後	1		○								兼1
		フランス語会話（中級） I	2前	1		○								兼1
		フランス語会話（中級） II	2後	1		○								兼1
		コミュニケーションフランス語 I A	3前	2		○								兼1
		コミュニケーションフランス語 I B	3後	2		○								兼1
	ドイツ語	入門ドイツ語 I	1前	1		○								兼1
		入門ドイツ語 II	1後	1		○								兼1
		基礎ドイツ語 I	1前	1		○								兼2
		基礎ドイツ語 II	1後	1		○								兼2
		応用ドイツ語 I	2前	1		○								兼1
		応用ドイツ語 II	2後	1		○								兼1
		総合ドイツ語 I	2前	1		○								兼1
		総合ドイツ語 II	2後	1		○								兼1

科目 区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通教育科目	外国語分野	ドイツ語	ドイツ語会話（初級）Ⅰ	1前		1		○								兼1	
		ドイツ語会話（初級）Ⅱ	1後		1		○								兼1		
		ドイツ語会話（中級）Ⅰ	3前		1		○								兼1		
		ドイツ語会話（中級）Ⅱ	3後		1		○								兼1		
		ロシア語	入門ロシア語Ⅰ	1前		1		○								兼1	
			入門ロシア語Ⅱ	1後		1		○								兼1	
			基礎ロシア語Ⅰ	1前		1		○								兼1	
			基礎ロシア語Ⅱ	1後		1		○								兼1	
			応用ロシア語Ⅰ	2前		1		○								兼1	
			応用ロシア語Ⅱ	2後		1		○								兼1	
			総合ロシア語Ⅰ	2前		1		○								兼1	
			総合ロシア語Ⅱ	2後		1		○								兼1	
		韓国・朝鮮語	入門韓国・朝鮮語Ⅰ	1前		1		○								兼2	
			入門韓国・朝鮮語Ⅱ	1後		1		○								兼2	
			基礎韓国・朝鮮語Ⅰ	1前		1		○								兼2	
			基礎韓国・朝鮮語Ⅱ	1後		1		○								兼2	
	応用韓国・朝鮮語Ⅰ		2前		1		○								兼2		
	応用韓国・朝鮮語Ⅱ		2後		1		○								兼2		
	総合韓国・朝鮮語Ⅰ		2前		1		○								兼1		
	総合韓国・朝鮮語Ⅱ		2後		1		○								兼1		
	ポルトガル語	入門ポルトガル語Ⅰ	1前		1		○								兼1		
		入門ポルトガル語Ⅱ	1後		1		○								兼1		
		基礎ポルトガル語Ⅰ	1前		1		○								兼1		
		基礎ポルトガル語Ⅱ	1後		1		○								兼1		
	日本語	日本語・表現Ⅰ	1前		1		○								兼1		
		日本語・表現Ⅱ	1後		1		○								兼1		
		日本語・論文技術（基礎）Ⅰ	1前		1		○								兼1		
		日本語・論文技術（基礎）Ⅱ	1後		1		○								兼1		
		日本語・総合Ⅰ	2前		1		○								兼1		
		日本語・総合Ⅱ	2後		1		○								兼1		
		日本語・論文技術（応用）Ⅰ	2前		1		○								兼1		
		日本語・論文技術（応用）Ⅱ	2後		1		○								兼1		
		アカデミック日本語Ⅰ	3前		2		○								兼1		
		アカデミック日本語Ⅱ	3後		2		○								兼1		
		ビジネス日本語Ⅰ	3前		2		○								兼1		
		ビジネス日本語Ⅱ	3後		2		○								兼1		
	外国理解	世界の言語Ⅰ	2前		2		○								兼2		
		世界の言語Ⅱ	2後		2		○								兼2		
		ラテン語Ⅰ	2・3・4		2		○								兼1		
		ラテン語Ⅱ	2・3・4		2		○								兼1		
		ギリシャ語Ⅰ	2・3・4		2		○								兼1		
		ギリシャ語Ⅱ	2・3・4		2		○								兼1		
		海外セミナーⅠ	1・2・3・4		2		○								兼1		
		海外セミナーⅡ	1・2・3・4		2		○								兼1		
		海外セミナーⅢ	1・2・3・4		2		○								兼1		
		海外セミナーⅣ	1・2・3・4		2		○								兼1		
		外国理解Ⅰ	1・2・3・4		2		○								兼1		
		外国理解Ⅱ	1・2・3・4		2		○								兼1		
		外国理解Ⅲ	1・2・3・4		2		○								兼1		
		外国理解Ⅳ	1・2・3・4		2		○								兼1		
	小計（104科目）			—	8	128	0	—			0	0	0	0	0	兼51	—
	数理・情報分野	教養数学	1・2・3・4		2		○								兼1		
		数理科学	1・2・3・4		2		○								兼1		
		確率入門	1・2・3・4		2		○								兼1		
		統計入門	1・2・3・4		2		○								兼1		
		情報倫理	1・2・3・4		2		○								兼1		
		マルチメディア表現	1・2・3・4		2		○								兼2		

別記様式第2号（その2の1）

科目 区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通教育科目	数理・情報分野	ネットワーク演習	1・2・3・4		2			○								兼1	
		社会データ分析入門	1・2・3・4		2			○								兼1	
		プログラミング	1・2・3・4		2				○							兼3	
		情報の科学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		情報と社会	1・2・3・4		2			○								兼1	
		情報総合演習	1・2・3・4		2				○							兼5	
		小計（12科目）	—	0	24	0	—			0	0	0	0	0	兼14	—	
	自然分野	物質の科学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		地球の科学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		宇宙の科学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		生命の科学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		環境の科学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		科学技術史	1・2・3・4		2			○								兼1	
		現代技術と社会	1・2・3・4		2			○								兼1	
		地球環境問題	1・2・3・4		2			○								兼2	
		自然環境と地理	1・2・3・4		2			○								兼1	
		動物行動学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		健康科学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		スポーツ工学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		トレーニング科学	1・2・3・4		2			○								兼1	
	小計（13科目）	—	0	26	0	—			0	0	0	0	0	兼11	—		
	社会分野	歴史学	1・2・3・4		2			○								兼3	
		考古学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		地理学	1・2・3・4		2			○								兼2	
		社会学	1・2・3・4		2			○								兼2	
		政治学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		経済学	1・2・3・4		2			○								兼2	
		法学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		経営学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		憲法学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		レクリエーション論	1・2・3・4		2			○								兼1	
		ジェンダー論	1・2・3・4		2			○								兼2	
		小計（11科目）	—	0	22	0	—			0	0	0	0	0	兼16	—	
	人文分野	哲学	1・2・3・4		2			○								兼2	
		論理学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		宗教学	1・2・3・4		2			○								兼2	
		心理学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		文化人類学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		現代の思想	1・2・3・4		2			○								兼2	
		民俗学	1・2・3・4		2			○								兼3	
		スポーツ文化論	1・2・3・4		2			○								兼1	
		日本事情Ⅰ	1・2・3・4		2			○								兼1	
		日本事情Ⅱ	1・2・3・4		2			○								兼1	
		文学	1・2・3・4		2			○								兼1	
		日本語学	1・2・3・4		2			○			1					兼2 兼2 兼1	
		古典の世界	1・2・3・4		2			○		2							
		言語と文化	1・2・3・4		2			○									
		芸術論	1・2・3・4		2			○									
	小計（15科目）	—	0	30	0	—			3	0	0	0	0	兼18	—		
	総合	総合科目	1・2・3・4		2			○								兼1	オムニバス・共同（一部）
		総合演習	2・3・4		2				○		1						
		キャリアデザイン基礎	1後		2			○								兼1	
		キャリアデザイン応用	2前		2			○								兼3	
		キャリアデザイン特殊講義	2・3・4		2			○								兼1	
	小計（5科目）	—	0	10	0	—			1	0	0	0	0	兼5	—		

科目 区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
共通教育科目	分野 体育	スポーツ・健康演習	1後	2				○							兼11	※実技、オムニバス
		スポーツ実技Ⅰ	2・3・4		1				○					兼5		
		スポーツ実技Ⅱ	2・3・4		1				○					兼4		
	小計（3科目）		—	2	2	0	—			0	0	0	0	0	兼12	—
専門教育科目	学部 共通 科目	文学部総合研究	1前	2			○			5					兼10	オムニバス・共同（一部）
		卒業論文	4通	8				○		5						
		入門講義（現代文化）	1前		2		○								兼5	オムニバス・共同（一部）
		入門講義（社会学）	1前		2		○								兼1	
		入門講義（心理学）	1前		2		○								兼2	オムニバス
		入門講義（歴史・地理学）	1前		2		○								兼6	
		入門講義（日本語日本文学）	1前		2		○			2						オムニバス・共同（一部）
		入門講義（欧米言語文化）	1前		2		○								兼4	
		入門演習（東アジア文化）	1後		2			○							兼1	オムニバス
		入門演習（哲学）	1後		2			○							兼1	
		入門演習（図書館情報学）	1後		2			○							兼1	
		入門演習（メディア芸術）	1後		2			○							兼2	
		入門演習（社会学）	1後		2			○							兼4	
		入門演習（心理学）	1後		2			○							兼4	
		入門演習（日本史学）	1後		2			○							兼3	
		入門演習（世界史学）	1後		2			○							兼2	
		入門演習（地理学）	1後		2			○							兼1	
		入門演習（日本語日本文学）	1後		2			○		2						
		入門演習（欧米言語文化）	1後		2			○							兼4	
	小計（19科目）		—	10	34	0	—			5	0	0	0	0	兼29	—
	演習 科目	日本語日本文学基礎演習ⅠA	2前		2			○		2						
		日本語日本文学基礎演習ⅠB	2前		2			○		2						
		日本語日本文学基礎演習ⅠC	2前		2			○		2						
		日本語日本文学基礎演習ⅠD	2前		2			○		2						
		日本語日本文学基礎演習ⅠE	2前		2			○		2						
		日本語日本文学基礎演習ⅡA	2後		2			○		1						
		日本語日本文学基礎演習ⅡB	2後		2			○		1						
		日本語日本文学基礎演習ⅡC	2後		2			○		1						
		日本語日本文学基礎演習ⅡD	2後		2			○		1						
		日本語日本文学基礎演習ⅡE	2後		2			○		1						
		日本語日本文学演習Ⅰ	3前	2				○		5						
		日本語日本文学演習Ⅱ	3後	2				○		5						
		日本語日本文学演習Ⅲ	4前	2				○		5						
		日本語日本文学演習Ⅳ	4後	2				○		5						
	小計（14科目）		—	8	20	0	—			5	0	0	0	0		—
	基幹 科目	日本古典文学概論	2後	2			○			1						
		日本近代文学概論	2前	2			○			1						
		日本語学概論	2前	2			○			1						
		日本語表現学概論	2後	2			○			1						
	小計（4科目）		—	8	0	0	—			4	0	0	0	0		—
	展開 科目	日本古典文学史	2前		2		○			1						兼1
		日本近代文学史	2後		2		○			1						
		日本語史	2後		2		○			1						
		日本古典文学講読Ⅰ	2後		2		○			1						
		日本近代文学講読Ⅰ	2後		2		○			1						
		日本語学講読Ⅰ	2後		2		○			1						
		日本古典文学講読Ⅱ	3前		2		○			1						
		日本近代文学講読Ⅱ	3前		2		○									
		日本語学講読Ⅱ	3前		2		○			1						

別記様式第2号（その2の1）

科目 区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門教育科目	展開科目	日本古典文学特殊講義	3後		2		○									兼1	
		日本近代文学特殊講義	3後		2		○			1							
		日本語学特殊講義	3前		2		○			1							
		日本語コミュニケーション特殊講義	3前		2		○			1							
		日本語文法論	3後		2		○			1							
	小計（14科目）		—	0	28	0	—			5	0	0	0	0	兼2	—	
	関連科目	レトリック研究	2前		2		○			1							隔年 隔年 隔年 隔年
		古典文学資料読解	2前		2		○									兼1	
		日本近代文学Ⅰ	2前		2		○								兼1		
		日本近代文学Ⅱ	2前		2		○								兼1		
		日本語教育研究Ⅰ	2前		2		○			1							
		日本語教育研究Ⅱ	2前		2		○			1							
		漢文学Ⅰ	2前		2		○								兼1		
		漢文学Ⅱ	2後		2		○								兼1		
		外国語としての日本語	2前		2		○			1							
		教育方法論	2前		2		○								兼1		
		国語科教育法	2前		2		○								兼1		
		国語科指導法Ⅰ	2前		2		○								兼1		
		国語科指導法Ⅱ	3前		2		○								兼1		
	小計（13科目）		—	0	26	0	—			2	0	0	0	0	兼7	—	
	他学部科目	GIS概論	1前		2		○									兼2	
		まちづくりとデータ分析	2前		2		○									兼1	
		地域資源論	3前		2		○									兼1	
		英米の地域と文化	2前		2		○									兼1	
		多文化共生論	3前		2		○									兼1	
	小計（5科目）		—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	兼4	—	
合計（232科目）			—	36	360	0	—			5	0	0	0	0	兼142		
学位又は称号		学士(文学)							学位又は学科の分野					文学関係			
卒業要件及び履修方法										授業期間等							
(1) 共通教育科目 44単位以上										1学年の学期区分					2学期		
a 外国語分野 第1外国語8単位、第2外国語6単位の計14単位必修										1学期の授業期間					15週		
b 数理・情報分野2単位、自然分野4単位、社会分野4単位、人文分野4単位の計14単位必修										1時限の授業時間					90分		
c 上記（1）bの各分野及び総合全体の中から計14単位必修																	
d 体育分野 2単位必修																	
(2) 専門教育科目 62単位以上																	
a 学部共通科目 14単位必修（文学部総合研究2単位、卒業論文8単位、入門講義2単位以上、入門演習2単位以上）																	
b 演習科目 14単位必修																	
c 基幹科目 8単位必修																	
d 展開科目 18単位必修																	
e 関連科目 6単位必修																	
f 上記（2）a、b、d、e及び他学科科目の中から 2単位必修																	
(3) 上記（1）共通教育科目、（2）専門教育科目の中から 18単位以上																	
(履修科目の登録の上限：44単位（年間））																	

授業科目の概要

（文学部 日本語日本文学科）

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	英語	Communicative English I	国際社会において活躍できるような高度な英語能力を身につけるために、発信的言語能力（話す書く技能）に中心を置いて指導する。英語での伝達ができるように、大学生としての英語基礎力を確実なものとする。このため、クラスのサイズも25名程度とし、学生が少しでも多くの発信的活動ができるように工夫する。英語による積極的なコミュニケーションスキルを身に付け、さまざまな状況で英語を使うときの自信を高め、さまざまな規模のグループで快適に話すことができることを目指す。	
			Communicative English II	国際社会において活躍できるような高度な英語能力を身につけるために、発信的言語能力（話す書く技能）に中心を置いて指導する。「Communicative English I」での学習を基礎として英語での発表ができるように、大学生としての英語応用力を身につける。このため、クラスのサイズも25名程度とし、学生が少しでも多くの発信的活動ができるように工夫する。英語による積極的なコミュニケーションスキルを身に付け、さまざまな状況で英語を使うときの自信を高め、さまざまな規模のグループで快適に話すことができることを目指す。	
			Reading I	国際化・情報化時代に対応できる実践的な実用英語を修得させる。世界にアクセスできる英語運用能力として識字能力と伝達能力をつけるためには、いわゆる和訳読解授業に陥ることなく多様な言語活動を教授者が用意する必要がある。入学後の英語テストによってクラスを能力別に編成とし、各レベルにあった教材と教授法によって総合的英語力を養成する。中級レベルにおいては、英語読み物に偏ることのない総合的テキストを統一的に利用しながら、それぞれの教授者が独自性を発揮し指導する。	
			TOEIC	国際化・情報化時代に対応できる実践的な実用英語を修得させる。特に、TOEICを念頭において授業展開を考える。これまで学んだ英語運用力を基礎として、さらにより実用的な英語力を養成することをねらいに、リスニング力をつけるため、テープなどによるリスニング練習だけでなく音読とシャドウイングなどを組み合わせ総合的に行う。また、TOEICの問題形式に添ったソフトを使用し、e-learningを行う。全員にTOEICを11月末に受験させ到達目標を明確にさせる。	
			Practical English I	国際化・情報化時代に対応できる実践的な実用英語を修得させる。世界にアクセスできる英語運用能力として識字能力と伝達能力をつけるためには、いわゆる和訳読解授業に陥ってはならない。英語を聞いたり書いたり発表したりなど多様な言語活動を教授者が用意する必要がある。前年度のTOEICの結果をもとに能力別に編成し、各レベルにあった教材と教授法によってそれぞれの教授者が独自性を発揮しながら総合的英語力を養成する。	
			Practical English II	国際化・情報化時代に対応できる実践的な実用英語を修得させる。「Practical English I」での学習を基礎として、世界にアクセスできる英語運用能力として識字能力と伝達能力をつけるためには、いわゆる和訳読解授業に陥ってはならない。英語を聞いたり書いたり発表したりなど多様な言語活動を教授者が用意する必要がある。学習者が何らかの到達目標を定め自宅学習に臨むことは語学教育においてきわめて重要である。その目標はより具体的に学習者に示すほうが理解しやすい。	
			Reading II	世界にアクセスできる英語運用能力として識字能力と伝達能力をつけるためには、いわゆる和訳読解授業に陥ることなく多様な言語活動を教授者が用意する必要がある。確かな英語読解力を身につけるために、精読とあわせ可能な限り多読の指導も行うこと、時事的な内容も含め多種多様な英文に触れさせることに注意を払って講義を展開する。前年度のTOEICの結果をもとに能力別に編成し、各レベルにあった教材と教授法によってそれぞれの教授者が独自性を発揮しながら総合的英語力を養成する。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	英語	ReadingⅢ	世界にアクセスできる英語運用能力として識字能力と伝達能力をつけるためには、いわゆる和訳読解授業に陥ることなく多様な言語活動を教授者が用意する必要がある。「ReadingⅡ」の学習を基礎として、さらに確実な英語読解力を身につけさせるために、精読とあわせ可能な限り多読の指導も行う。また、時事的な内容も含め多種多様な英文に触れさせることに注意を払って講義を展開する。本クラスは、能力別に編成し、各レベルにあった教材と教授法によってそれぞれの教授者が独自性を発揮しながら総合的英語力を養成する。	
			Current English I	英語の実践的な能力を身につけるためには、「時事英語」も極めて重要である。特に本学部のように現代の社会に則した英語に触れるためには、英字新聞雑誌 (Time や Newsweek) や英米の英語放送 (New York Times や Japan Times、BBC のオンライン・ニュース) を題材として利用する必要がある。また、海外での実際のビジネスに必要な技能としての英語にも配慮しながら授業を展開する。学生は様々な活動、グループワーク、そしてプレゼンテーションを通してできるだけ英語を聞いて話すことが求められる。グループワークのために、学生は新聞記事を読み、様々な人々と話すことが必要となる。	
			Current English II	「Current English I」の学習を基礎として、英語のより実践的な能力を身につけることが重要である。特に本学部のように現代の社会に則した英語に触れるためには、英字新聞雑誌 (Time や Newsweek) や英米の英語放送 (New York Times や Japan Times、BBC のオンライン・ニュース) を題材として利用する必要がある。また、海外での実際のビジネスに必要な技能としての英語にも配慮しながら授業を展開する。学生は様々な活動、グループワーク、そしてプレゼンテーションを通してできるだけ英語を聞いて話すことが求められる。グループワークのために、学生は新聞記事を読み、様々な人々と話すことが必要となる。	
			Communication Skills I	レベル別としては中級 (下) にあたる。少人数で行うため、発信型の英語力をより伸ばすことを狙いとする。そのために、必ず英語で話したり書いたりする要素を含めて授業を展開する。テキストに読解が含まれていてもよいが、話したり書いたり言語活動につながるものでなければならない。できる限り多様な言語活動を通じて英語を学ぶ意義を把握し、英語の運用能力を高め、TOEIC500 点以上を目指す。受講生の積極的な授業参加が必要となる。	
			Communication Skills II	レベルとしては中級 (上) にあたる。少人数で行うため、発信型の英語力をより伸ばすことを狙いとする。そのために、必ず英語で話したり書いたりする要素を含めて、授業を展開していく。テキストに読解が含まれていてもよいが、話したり書いたり言語活動につながるものでなければならない。できる限り多様な言語活動を通じて英語を学ぶ意義を把握し、英語の運用能力を高め、TOEIC550 点以上を目指す。受講生の積極的な授業参加が必要となる。	
			Communication SkillsⅢ	レベルとしては上級 (下) にあたる。少人数で行うため、より発信型の英語力をより伸ばすことを狙いとする。そのために、授業は、必ず英語で話したり書いたりする要素を含めて展開する。テキストに読解が含まれていてもよいが、話したり書いたり言語活動につながるものでなければならない。できる限り多様な言語活動を通じて英語を学ぶ意義を把握し、英語の運用能力を高め、TOEIC600 点以上を目指す。受講生の積極的な授業参加が必要となる。	
			Communication SkillsⅣ	レベルとしては上級 (上) にあたる。少人数で行うため、より発信型の英語力をより伸ばすことを狙いとする。そのために、授業は、必ず英語で話したり書いたりする要素を含めて展開する。テキストに読解が含まれていてもよいが、話したり書いたり言語活動につながるものでなければならない。できる限り多様な言語活動を通じて英語を学ぶ意義を把握し、英語の運用能力を高め、TOEIC650 点以上を目指す。受講生の積極的な授業参加が必要となる。	
	中国語	中国語	入門中国語 I	中国語の基礎は発音で、その目標は中国式ローマ字＝ピンインで書かれた音節表をすべて正しく読めることである。一つの音節は一つの漢字に対応している。したがってピンインが正しく読めれば、漢字そして単語が読め、そして文がつくれることになる。中国語は単語に変化がないので、単語をいかに並べるかがつぎの課題＝文法になる。「入門中国語 I」では簡単なあいさつ表現を中心に学びながら、同時に名詞、数詞、動詞、形容詞文等基礎的な文法を学ぶ。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	中国語	入門中国語Ⅱ	「入門中国語Ⅱ」では発音の基礎を固めるとともに、数字の表現、日時、曜日、買い物の常用表現、ことばの話題、天気の話、友だちの家を訪問する等場面別の表現をより広く学ぶ。文法としては場所、対象を表す前置詞、能力、願望、当為を表す助動詞、結果補語、方向補語、可能補語等各種の補語の基本的用法、動詞の連用（連動式、兼語式）、比較の前置詞を使った比較表現、同等表現を学ぶとともに、仮定・条件、因果関係、逆説等の接続詞を含む複文のいくつかを学ぶ。	
			基礎中国語Ⅰ	基礎中国語は入門中国語を補完しながら進めていくもので、中国式ローマ字＝ピンインで書かれた音節表をすべて正しく読めるとともに、音声を聞いてこれをピンインに変換することができるよう練習する。基礎中国語では、簡単なあいさつ表現を学びながら、場所や対象を表す前置詞、能力・願望を表す助動詞についても紹介する。また、習った単語をいかに並べていくかという語順についても、日本語、英語との違いに留意して理解させるようにする。	
			基礎中国語Ⅱ	「基礎中国語Ⅱ」では、発音の基礎を固め、ピンインと実際の音声との乖離現象にも注意しながら、聞いた中国語をピンインでも書けることを目指す。場面別の表現を広く学ぶとともに、文法としてはテンス・アスペクト（了、着、在）、経験、基本的な結果補語、方向補語、可能補語等各種の補語にも慣れ、中国語らしい表現を学ぶようにする。さらに、動詞の連用のいくつかのタイプ（連動式、兼語式）を学ぶとともに、複文の中国語にもふれるようにする。	
			応用中国語Ⅰ	応用中国語は主にネイティブの教師による授業である。入門・基礎で学んだ文法事項、単語を踏まえながら、発音の基礎をより強固なものにするとともに、中国人教師とのやりとりを通し実際に中国語を使い、また具体的ないくつかの場面を通して、習ったことを口頭でも言えるように練習し、実際に使えるレベルまでを目指す。文法事項としては、方向補語の派生義、目的、逆接、添加、除外等の接続詞を学ぶことで、より複雑な文が理解できることをめざす。	
			応用中国語Ⅱ	応用中国語は主にネイティブの教師による授業である。「応用中国語Ⅰ」をふまえ、その基礎の上に、さらに高度な口頭表現ができるようにする。口頭表現を自分のものにするには、暗唱とともに中国人教師との実際の会話を通し、通じる中国語、使える中国語を修得するようにしなくてはならない。また、離合詞や動詞フレーズ、慣用句、より多くの結果補語、方向補語の基本的な派生義の表現をたくさん覚え、中国語らしい中国語がしゃべれることを目指す。	
			総合中国語Ⅰ	「総合中国語Ⅰ」では、主に講読の授業を行う。日本において中国語によるコミュニケーション力をつけるためには、文字で書かれたものを通しより多くの中国語をインプットする必要がある。そのため、中国の社会と文化がわかるような読み物を中心に、辞書を引きながら中国語で書かれた文章を読めるよう訓練をする。語彙を増やすため、適宜分野別の語彙を提示する。文法的には程度、時間、頻度を表す副詞、慣用句、目的、逆接、添加、除外等の複文の学習に重点を置く。	
			総合中国語Ⅱ	「総合中国語Ⅱ」では、主に講読の授業を行う。日本において中国語によるコミュニケーション力をつけるためには、文字で書かれたものを通しより多くの中国語をインプットする必要がある。「総合中国語Ⅱ」では、「総合中国語Ⅰ」をふまえ、中国の社会と文化を反映した読み物を辞書を引きながら読む中で、読解力を高め、同時に中国の社会を知る一助とする。語彙を増やすため、適宜分野別の語彙を提示するほか、文法的には程度、時間、頻度を表す副詞、離合詞、慣用句、目的、逆接、添加、除外等の複文の学習に重点を置く。	
			中国語会話（初級）Ⅰ	基礎中国語、入門中国語と連動するもので、日本人教師から習った発音の説明をふまえ、発音を矯正、確立させる。学習者が出会うであろう、出会い、遊び、学習、買い物、病気、言語等々場面別の基本的な表現を学び、これを実際に使えるレベルを目指す。語彙を増やすため、基本単語集の学習を勧めるほか、分野別の語彙の習得も目指す。文法的には程度、時間、頻度を表す類義的な副詞、離合詞、慣用句、目的、逆接、添加、除外等の複文の学習に重点を置く。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	中国語	中国語会話（初級）Ⅱ	「中国語会話（初級）Ⅰ」をふまえ、発音の矯正、強化に常に注意を払いながら、少しでも長い文を会話できるようにする。「中国語会話（初級）Ⅱ」では「中国語会話（初級）Ⅰ」をふまえ、旅行、料理、誕生祝い、ハイキング等の場面を通し、そういう場で必要な中国語表現を学習できるようにする。語彙を増やすため、習った文章から単語を品詞別に抜き出したり、分野別の語彙を調べさせたりする。文法的には程度、時間、頻度を表す類義的な副詞、離合詞、慣用句、目的、逆接、添加、除外等の複文の学習に重点を置く。	
		中国語会話（中級）Ⅰ	授業の大半は中国語で行う。発音の矯正、強化につねに注意を払うとともに、語彙力を増やし、慣用句、成語等にも親しみ、中国人の発想を知るとともに、それらを少しでも使えるよう務める。履修者は自分のことを少しでも中国語で表現できるとともに、実際に会うであろう多くの場面での基本的な表現を学ぶこととなる。文法的には、類義的な副詞、接続詞、助動詞、動詞、形容詞を学ぶ他、類義的な結果補語についても注意を促す。		
		中国語会話（中級）Ⅱ	授業の大半は中国語で行う。「中国語会話（中級）Ⅰ」をふまえ、履修者は自分の言いたいことを少しでも中国語で表現できることを目指すとともに、常用語句、文型を自由に使えるよう文作りの練習をし、簡単な自由作文も書けることを目指す。また、日常のできごとを中国語で書き、中国人教師の添削を受けるとともに、それを教室で口頭発表できるようにする。文法的には、類義的な副詞、接続詞、助動詞、動詞、形容詞を学ぶほか、紛らわしい結果補語についても注意を促す。		
		コミュニケーション中国語ⅠA	授業はすべて中国語で行う。中国語で書かれた現代中国の世相、文化を扱った話題を読みながら、それについて中国語で質問をしたり、自分の意見を言えるようなコミュニケーション能力の養成をめざす。また、常用語句、文型については、これを使えるよう、文づくりの練習をする。併せてテレビドラマを視聴し、それについての感想を書いたり言えることを目指す。文法的には結果補語や方向補語の派生義を自由に使えること、また、二つ以上の文をつないで言えるような訓練をする。		
		コミュニケーション中国語ⅠB	授業はすべて中国語で行う。中国語で書かれた現代中国が抱える様々な問題についての小説、エッセイ、ルポルタージュ、新聞の文章を読みながら、それについて中国語で質問をしたり、自分の意見を言えるようなコミュニケーション能力の養成をめざす。また、常用語句、文型については、これらを使って文づくりの練習をする。併せて、テレビドラマを視聴し、リスニング力を高めるとともに、それについて感想を述べたり、書いたりすることを目指す。		
		コミュニケーション中国語ⅡA	この時間は主に中国語で書かれた文章を細かく読む訓練を行う。コミュニケーション能力を養うには、なにより多くのインプットが必要であるが、日本にいてそれを行うにはどうしても書いたものを多く読む必要がある。ここでは中国語で書かれた文章を独力で正確に読めるようになるための訓練を行う。中国語では一つ一つの文がどうつながっているか、どうかかわっているかを読み取る必要がある。そこで、この時間では、各種の辞書を徹底して引く訓練をするともに、文のつながり、構造が理解できるような授業をめざす。		
		コミュニケーション中国語ⅡB	この時間は主に中国語で書かれた文章を細かく読む訓練を行う。コミュニケーション能力を養うには、なにより多くの中国語をインプットする必要があるが、日本に住んでいてそれを行うにはどうしても書いたものを多く読む必要がある。中国語で書かれた文章を辞書の力に頼りながらも独力で正確に読めるようになるための訓練を行う。新語は一般の辞書にはないことが多いので、新語辞典を紹介するほか、インターネット（特に百度）で検索する訓練も指導する。		
	フランス語	入門フランス語Ⅰ	この授業は、フランス語の初心者に向けたもので、フランス語の最初歩（自己紹介、あいさつ、自分や家族についての表現）を身につけることを目標とする。具体的には、自己紹介、挨拶、自分の好みを表現すること、及び、家族、持ち物、住んでいる場所、好み、等に関する簡単な質問をすることを学ぶ。また、レッスンと関係する文化的側面も授業で扱う。授業形態は、毎回、見本として簡単な会話文を利用して、発音を練習し、語彙と文法を習得するというもので、それに続いて、会話と筆記の問題練習を行う。		

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	フランス語	入門フランス語Ⅱ	この授業は、フランス語の初心者に向けたもので、フランス語の初歩（自分について、また自分の経験や予定についての表現）を身につけることを目標とする。今学期は、特に自分に関する情報（スポーツ、日常生活、アルバイト等）をあたえること、また、自分の経験や予定について語ることを学ぶ。レッスンと関係する文化的側面も授業で扱う。授業形態は、毎回、見本として簡単な会話文を利用して、発音を練習し、語彙と文法を習得するというもので、それに続いて、会話と筆記の問題練習を行う。	
			基礎フランス語Ⅰ	この授業は、「入門フランス語Ⅰ」と連動し、これを側面から応援するとともに、フランス語の初級文法の骨組みを理解することを目指すものである。春学期は、その最初歩の習得を行い、文字、発音から始まって「現在」の事象について理解、表現できることを目標とする。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解いたり、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、フランス語の最基礎を習得することを目指す。	
			基礎フランス語Ⅱ	この授業は、「入門フランス語Ⅱ」と連動し、これを側面から応援するとともに、フランス語の初級文法を理解することを目指すものである。秋学期は、その初歩の習得を行い、「現在」のみではなく「過去」や「未来」に関する事象についても理解、表現できることを目標とする。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解いたり、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、フランス語の基礎を習得することを目指す。	
			応用フランス語Ⅰ	この授業は、1年生で入門および基礎フランス語を履修した学生に向けたもので、初級フランス語を習得した後に、更にステップアップした語学能力を取得させるために、フランス語の基礎の確認と補足を行う。初級文法をさらに推し進め、簡易なフランス語の文章が読める程度の語学力獲得を目指す。授業形態は、フランスに関する文章を、辞書を用いて読解してもらうとともに、練習問題を解くことによってフランス語初級文法の確認と復習をする。また、フランスの文化や習俗についても学び理解を深める。	
			応用フランス語Ⅱ	春学期、「応用フランス語Ⅰ」で身につけた、初級フランス語からさらにステップアップした語学能力に基づいて、本格的な中級程度のフランス語習得を目指す。初級文法をさらに推し進め、通常のフランス語の文章が読める程度の語学力獲得を目指す。授業形態は、フランスに関する文章を、辞書を用いて読解してもらうとともに、練習問題を解くことによってフランス語中級文法を習得する。さらに広くフランス文化一般についても知見を広げ、またプレゼンテーション能力も身に付けさせる。	
			総合フランス語Ⅰ	この授業は、1年生で入門および基礎フランス語を履修し、さらに、「応用フランス語Ⅰ・Ⅱ」及びこの授業に続く「総合フランス語Ⅱ」と合わせて、フランス語で8単位の修得をめざす学生に向けたものである。「読む」「書く」「聴く」「話す」という語学の4技能について、総合的にトレーニングし、コミュニケーション能力の基礎を修得する。具体的には、1年生で身につけた知識をより強固なものとし、コミュニケーションの各場面を自分のものにする。（原則としてフランス語による授業とする）	
			総合フランス語Ⅱ	この授業は、春学期「応用フランス語Ⅰ」「総合フランス語Ⅰ」を履修し、さらに「応用フランス語Ⅱ」と合わせて、フランス語で8単位の取得をめざす学生に向けたものである。「読む」「書く」「聴く」「話す」という語学の4技能について、総合的にトレーニングし、コミュニケーション能力の基礎を修得する。具体的には、春学期に「総合フランス語Ⅰ」で身につけた基礎をより強固なものとし、会話力のみならず文章力も身につけるようにする。（原則としてフランス語による授業とする）	
			フランス語会話（初級）Ⅰ	この授業は、「入門フランス語Ⅰ」及び「基礎フランス語Ⅰ」を補って、口頭でのコミュニケーション能力を身につけようとする学生のために設けられた、週3コマ目のフランス語の選択クラスである。口頭で言いたいことを伝えるための最初歩を習得する。春学期は、とりわけ挨拶や短いやり取りなどの最基礎を、少人数クラスであることを生かして、徹底的な発音練習によって自分のものとする。（フランス語による授業とする）	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	フランス語	フランス語会話（初級）Ⅱ	この授業は、「入門フランス語Ⅱ」及び「基礎フランス語Ⅱ」を補って、口頭でのコミュニケーション能力を身に付けようとする学生のために設けられた、週 3 コマ目のフランス語の選択クラスである。口頭で言いたいことを伝えるための初歩を習得する。秋学期は、とりわけ簡単なやり取りなどの基礎を、少人数クラスであることを生かして、徹底的な口頭練習によって自分のものとする。書き言葉は練習問題の形でわずかに登場する。（フランス語による授業とする）	
			フランス語会話（中級）Ⅰ	この授業は「応用フランス語Ⅰ」及び「総合フランス語Ⅰ」を補って、口頭でのコミュニケーション能力を身に付けようとする学生のために設けられた、週 3 コマ目のフランス語の選択クラスである。会話や遊びを通したコミュニケーションや口頭表現に重点を置き、最も簡単な言葉でフランス語圏の人と交流できることを目標とする。春学期は、とりわけ 1 年生で身に着けた知識を会話で使えるように強固なものとし、練習によって流暢さを身につける。また声調のトレーニングもする。（フランス語による授業とする）	
			フランス語会話（中級）Ⅱ	この授業は「応用フランス語Ⅱ」及び「総合フランス語Ⅱ」を補って、口頭でのコミュニケーション能力を身に付けようとする学生のために設けられた、週 3 コマ目のフランス語の選択クラスである。会話や遊びを通したコミュニケーションや口頭表現に重点を置き、簡単な言葉でフランス語圏の人と交流できることを目標とする。秋学期は、とりわけ生の資料やシャンソンを通してより柔軟な会話力を身に着ける。また、ペアあるいは 3 人で会話を作ったり、小発表を個人やグループでしたりする。（フランス語による授業とする）	
			コミュニケーションフランス語ⅠA	この授業は、これ以前に、既に 4 学期間フランス語の授業を受けた学生を対象とし、コミュニケーションを通してコミュニケーションを学ぶ。春学期の目標は、自分の身の回りのことについて簡単な表現ができることで、学生は非常に多様なシチュエーションをマスターしなければならない。問題に対して見解を示して自分の言うことを理解させ、さらにネイティブの言うことを理解せねばならない。この点で、文化的な文脈を身に着けることができる生の資料（映画、新聞記事等）は大切である。	
			コミュニケーションフランス語ⅠB	この授業は、これ以前に、既に 5 学期間フランス語の授業を受けた学生を対象とし、コミュニケーションを通してコミュニケーションを学ぶ。秋学期はより広く抽象的なテーマを扱い、さらに一人一人の意見を要求する。秋学期は、個人あるいはグループでの発表、前もって書き下ろした会話を用い、クラス内で相互反応を引き起こして、口頭表現に向けて学習者を導いてゆく。この授業の目標は口頭表現ではあるが文章表現もおろそかにはできない。	
			コミュニケーションフランス語ⅡA	〔この授業は、「コミュニケーションフランス語ⅠA」と連動し、併せて週 2 回の集中コースを構成する。〕この授業は、これ以前に、既に 4 学期間フランス語の授業を受けた学生を対象とし、コミュニケーションを通してコミュニケーションを学ぶ。春学期の目標は、自分の身の回りのことについて簡単な表現ができることで、学生は非常に多様なシチュエーションをマスターしなければならない。問題に対して見解を示して自分の言うことを理解させ、さらにネイティブの言うことを理解せねばならない。この点で、文化的な文脈を身に着けることができる生の資料（映画、新聞記事等）は大切である。	
			コミュニケーションフランス語ⅡB	〔この授業は、「コミュニケーションフランス語ⅠB」と連動し、併せて週 2 回の演習の集中コースを構成する。〕この授業は、これ以前に、既に 5 学期間フランス語の授業を受けた学生を対象とし、コミュニケーションを通してコミュニケーションを学ぶ。秋学期はより広く抽象的なテーマを扱い、さらに一人一人の意見を要求する。秋学期は、個人あるいはグループでの発表、前もって書き下ろした会話を用い、クラス内で相互反応を引き起こして、口頭表現に向けて学習者を導いてゆく。この授業の目標は口頭表現ではあるが文章表現もおろそかにはできない。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	ドイツ語	入門ドイツ語Ⅰ	ドイツ語の初学者を対象に、日常会話程度の基礎的なドイツ語コミュニケーション能力を身につけることを目指す。また言語の学習を通して、ドイツの文化や生活への理解を深める。まず、ドイツ語の正しい発音、アクセントを繰り返し練習する。その後、日常の挨拶、簡単な自己紹介から始めて、大学での専攻の説明、さらに自分の好み（趣味や食べ物など）や自分の家族について、簡単なドイツ語で表現することを学ぶ。グループやパートナー練習を中心に授業を行う。	
			入門ドイツ語Ⅱ	ドイツ語の初学者を対象に、日常会話程度の基礎的なドイツ語コミュニケーション能力を身につけることを目指す。また言語の学習を通して、ドイツの文化や生活への理解を深める。「入門ドイツ語Ⅰ」で習得した初歩的なドイツ語の会話能力をもとに、引き続きドイツ語の基礎的口語表現を学んでいく。ドイツ語の正しい発音やアクセントの練習を繰り返しながら、自分の持ち物や住居について、さらに週末や休暇の過ごし方等についてドイツ語で表現することを学ぶ。グループやパートナー練習を中心に授業を行う。	
			基礎ドイツ語Ⅰ	ドイツ語の初学者を対象に、ドイツ語の基礎となる文法知識の習得を目指す。また言語の学習を通じて、ドイツの文化や生活への理解を深める。まず、ドイツ語の正しい発音やアクセントを練習した後、動詞の人称変化や名詞の格変化を繰り返し口頭で練習し、基礎的な変化を身につける。内容をよく理解したうえで、できるだけ多くの練習問題を解くことで、ドイツ語の基本的な力を養う。また、文法の進度に合わせて、辞書を用いて平易なドイツ語の文章を読む練習もする。	
			基礎ドイツ語Ⅱ	ドイツ語の初学者を対象に、ドイツ語の基礎となる文法知識の習得を目指す。また言語の学習を通じて、ドイツの文化や生活への理解を深める。「基礎ドイツ語Ⅰ」で習得した初級文法の知識をもとに、動詞の三基本形や、過去形、完了形などの重要な文法事項を学ぶ。内容をよく理解したうえで、できるだけ多くの練習問題を解くことで、ドイツ語の基本的な力を養う。また、文法の進度に合わせて、やや複雑なドイツ語の文章や、ある程度まとまった量のドイツ語を、辞書を用いながら読む練習をする。	
			応用ドイツ語Ⅰ	ドイツ語の初級者を対象に、ドイツ語を読む、書く、聞く、話すといった総合的な運用能力の習得を目指す。また言語の学習を通じて、ドイツの文化や生活への理解を深める。1年次において修得したドイツ語の基礎的語学能力を一層確実なものにするため、授業では、練習問題など文法の復習も出来るだけ行いながら、ドイツ語の言語構造への理解をも深めていきたい。また基礎的な会話表現にもできるだけ多く触れて、口頭練習を繰り返すことで、自分の言いたいことを簡単なドイツ語で表現できるようにする。	
			応用ドイツ語Ⅱ	ドイツ語の初級者を対象に、ドイツ語を読む、書く、聞く、話すといった総合的な運用能力の習得を目指す。また言語の学習を通じて、ドイツの文化や生活への理解を深める。「応用ドイツ語Ⅰ」に引き続き、1年次において修得したドイツ語の基礎的語学能力を一層確実なものにするため、授業では、練習問題など文法の復習も出来るだけ行いながら、中級ドイツ語学習への橋渡しをする。また基礎的な会話表現にもできるだけ多く触れて、口頭練習を繰り返すことで、さらなるレベルアップをはかる。	
			総合ドイツ語Ⅰ	総合ドイツ語は、ドイツ語を第1外国語に選択した学生を対象とする授業である。この授業では、読む、書く、聞く、話すという語学の4技能のうち、なかでも「話す」ことに重点をおき、ドイツ語を使うことによって基礎力を養成することを目標とし、少しずつドイツ語で「できる」ことを増やしていく。文法知識の定着だけでなく、簡単なドイツ語で発信する、簡単なドイツ語で書かれた情報を読み取る力をつけていく。ペアワーク、グループワークを多く取り入れる。	
			総合ドイツ語Ⅱ	総合ドイツ語は、ドイツ語を第1外国語に選択した学生を対象とする授業である。この授業では、読む、書く、聞く、話すという語学の4技能のうち、なかでも「話す」ことに重点をおき、ドイツ語を使うことによって基礎力を養成することを目標とし、少しずつドイツ語で「できる」ことを増やしていく。文法知識の定着だけでなく、簡単なドイツ語で発信する、簡単なドイツ語で書かれた情報を読み取る力をつけていく。国内・外のドイツ語検定試験の受験に向けての準備となる授業である。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	ドイツ語	ドイツ語会話（初級）Ⅰ	ドイツ語の基礎的会話能力の習得を目指す。「ドイツ語の聞き取り能力の向上」「日常的な会話の運用能力が身につく」「異文化を理解する能力が身につく」をテーマに、それを実現するためのDVD教材を用いた授業となる。ドイツの語学研修に参加した主人公と一緒に、ドイツ到着から、日常生活における様々な場面（ホストファミリーや語学学校でのやりとり、レストランや郵便局など）を取り上げ、基礎的で自然なドイツ語の言い回しを学ぶ。アクティブな会話演習を中心に授業を行う。	
			ドイツ語会話（初級）Ⅱ	ドイツ語の基礎的会話能力の習得を目指す。「ドイツ語の聞き取り能力の向上」「日常的な会話の運用能力が身につく」「異文化を理解する能力が身につく」をテーマに、それを実現するためのDVD教材を用いた授業となる。「ドイツ語会話（初級）Ⅰ」に引き続き、ドイツの語学研修に参加した主人公と一緒に、日本へ帰国するまでの、日常生活における様々な場面（商店、医院、駅、ホテル、空港など）を取り上げ、基礎的で自然なドイツ語の言い回しを学ぶ。	
			ドイツ語会話（中級）Ⅰ	CD教材を用いた学習を通して、まず、聞き取り能力の向上と日常的な会話の運用能力を身につけること、さらに、異文化体験を通してドイツの文化の理解をふかめることを目指す。1・2年次で習得した日常会話程度の基礎的なドイツ語コミュニケーション能力をさらに深め、文字に頼ることなくドイツ語が話せるように、アクティブな会話演習を中心に授業を行う。天気をめぐるやり取りや、日常生活における様々な場面（駅、レストラン、ホテル、街中、病院など）を取り上げ、自然なドイツ語の言い回しを学ぶ。	
			ドイツ語会話（中級）Ⅱ	CD教材を用いた学習を通して、まず、聞き取り能力の向上と日常的な会話の運用能力を身につけること、さらに、異文化体験を通してドイツの文化の理解をふかめることを目指す。「ドイツ語会話（中級）Ⅰ」に引き続き、1・2年次で習得した日常会話程度の基礎的なドイツ語コミュニケーション能力をさらに深め、文字に頼ることなくドイツ語が話せるように、アクティブな会話演習を中心に授業を行う。招待された時のやり取りや、人物に関する説明、さらには、ごみと環境などの社会的なテーマについて自分の意見をドイツ語で述べることを学ぶ。	
	ロシア語		入門ロシア語Ⅰ	初級中級レベルの外国語の学習者は、自分が会話において使えない表現や語彙は聞き取れない。よって、この「入門ロシア語Ⅰ」では、音声訓練を重視し、語学の運用能力を身につけるために必要なロシア語の音声・発音の基礎を習得することを目指す。簡単な疑問文とその受け答えのパターン構文を用いながら、人間に関する語彙、曜日などの時間関係表現、身の回りにある物をはじめとする基本語彙を覚え、キリル文字の発音やロシア語における文のイントネーション・パターンを習得する。	
			入門ロシア語Ⅱ	「入門ロシア語Ⅰ」で学習したロシア語の文字と発音練習を基礎として、自分のことをロシア語で話すために必要な表現や語彙をさらに増やしていく。特定のテーマを設定し、テーマごとにパターン構文を用いながら、年齢表現、家族についての表現、時間・時刻表現、場所表現、動作表現などの表現や語彙を習得していく。さらに進め、好悪の表現、身体・心理状態の表現、依頼の仕方、許可を得る・与える表現などについても学び練習を繰り返す。授業が練習だけに終わらないように、ロシアや時にはロシアの文化の紹介なども行う。	
			基礎ロシア語Ⅰ	ロシア語は、英語と同じインド・ヨーロッパ言語語族に属する言語であるが、英語以外の他のヨーロッパ言語と同じく、すでに英語が失ってしまった言語特徴を多く保っている。よって、文法学習は、ロシア語習得への近道となる。「基礎ロシア語Ⅰ」では、英語や日本語の文法と比較しながら、ロシア語のキリル文字と発音の規則、名詞の性と数の区別、形容詞をはじめとする名詞を修飾する語、動詞の活用（現在形・過去形）およびその未来表現といった文法事項を理解することを目指す。	
			基礎ロシア語Ⅱ	この科目では、「基礎ロシア語Ⅰ」に引き続いて、英語や日本語の文法と比較しながら、ロシア語の初級文法を学習する。まず、再帰動詞（—ся 動詞）の活用（現在形・過去形）およびその未来表現を学習した後、6格（主格・生格・与格・対格・造格・前置格）について学習する。6格は、日本語の助詞に対応する意味機能を担っており、特に重要な文法事項である。例文と練習問題を通して、6格のそれぞれの用法を理解し、その語尾変化を覚えることを目指す。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	ロシア語	応用ロシア語Ⅰ	「応用ロシア語Ⅰ」では、形容詞の格変化とその用法および動詞の体や命令形についての文法事項を学習し、ロシア語初級文法の学習を完成させる。そして、ロシア語はヨーロッパ言語の中でも語尾変化が多い言語であるため、辞書で単語を引くことに慣れる必要がある。辞書を使用できるようになるために、ロシア語の 6 格の使い方に慣れ、文法表の見方を修得し、辞書と活用表を使用しながらであれば、ロシア語の簡単なテキストが読めるようになることを目指す。同時に、ロシア文化を紹介する時間も持つ予定である。	
			応用ロシア語Ⅱ	テキスト講読は、外国人が語彙を増やすための近道であるが、語尾変化の多いロシア語では、辞書の標記の仕方について学習する必要がある。この科目では、辞書における、不規則変化の標記の仕方や、また、その語が何格と共に用いられるのかといった格支配の標記の仕方を学習する。加えて、関係代名詞や移動動詞や数詞が絡む文法事項を学習し、辞書と活用表を使用しながら、複雑な構文を含む中級レベルのテキストを読むことができることを目指す。また、ロシア文化を紹介する時間も持つ予定である。	
			総合ロシア語Ⅰ	「総合ロシア語Ⅰ」では、「入門ロシア語Ⅰ・Ⅱ」と「基礎ロシア語Ⅰ・Ⅱ」で学んできた文法知識と語彙や表現を再確認しながら、ロシア語の運用能力をさらに高めていく。この授業では、特に「聞く活動」と「話す活動」を中心に進めていきながら、人・もの・食・音楽・スポーツ・絵画といったテーマの語彙を増やすことを目指す。そして、自己紹介や家族紹介をはじめとして、「自分のことについて話すことができる!」を目標において授業をすすめていく。	
			総合ロシア語Ⅱ	この科目では、「総合ロシア語Ⅰ」に引き続いて、「聞く活動」と「話す活動」を中心に進めていきながら、ロシア語の運用能力を高めていく。特定の場面（道案内、市場、お店、レストラン、郵便局、劇場など）を設定し、それらの場面で使われる語彙や表現を増やすことを目指す。「入門ロシア語Ⅰ・Ⅱ」、「基礎ロシア語Ⅰ・Ⅱ」で学んできた文法知識と語彙や表現を再確認しながら、「様々な場面で自分の意思を伝えることができる!」を目標において授業をすすめていく。	
	韓国・朝鮮語		入門韓国・朝鮮語Ⅰ	韓国は日本にとって最も近い国で、経済面及び文化面でもこの地域と密接な関係にある。最初にきわめて合理的に作られたハングル文字を学び、同時に視聴覚機器を利用しながらその発音を練習する。具体的には、子音字、激音、濃音、合成母音字、終声音、二文字の終声音などを繰り返し聞いたり発音したりして、練習を繰り返す。前半の「文字と発音編」では、韓国・朝鮮語の文字と発音をしっかりと身につけ、次のステップ「読む・聞く・書く・話す」のための土台づくりをする。後半の「会話と文法編」では、インプットとアウトプットをバランス良く並行し、自然と身につく韓国語、使える韓国語を目指す。	
			入門韓国・朝鮮語Ⅱ	韓国・朝鮮語の学習においてハングル文字は最初の大難関である。「入門韓国・朝鮮語Ⅰ」の集中的な文字及び発音の練習を基礎として、ハングル文字がある程度読めるようになった段階で、いろいろな場面における簡単な会話を練習する。日常での挨拶、買い物でのやりとり、レストランでの簡単な注文など場面設定を行い、リスニングを含めた練習を繰り返す。授業が単調な練習だけに終わらないように、韓国大衆文化（映画・音楽・飲食など）の紹介なども行う。	
			基礎韓国・朝鮮語Ⅰ	韓国・朝鮮語の基礎を学ぶ上で、韓国・朝鮮語の文法は不可欠である。韓国・朝鮮語の語順は日本語の語順と酷似しているため、それを理解した上で韓国・朝鮮語の言語的特徴について学ぶ。正確な発音を身につけるため初期の学習から必ず音声教材を用い、日本語にない発音、発音の変化について単語を覚える際に意識して練習することが必要になる。文法を修得するためにテキストに従い、初歩的な文法事項を学び、各種練習問題をこなしながら同時に基本語彙を修得する。また、時には簡単な読み物を読み、韓国人やその文化への理解を深める。	
			基礎韓国・朝鮮語Ⅱ	韓国・朝鮮語の語順は日本語の語順と酷似しているため、それを理解した上で韓国・朝鮮語の言語的特徴について学ぶ。基本的な文の構造と表現力を養うのに重点をおきますができるだけ学生諸君の五感をすべて使いこなす授業を目指す。「基礎韓国・朝鮮語Ⅰ」の学習を基礎にして、あらたまった丁寧な表現、うちとけた丁寧な表現や尊敬形（韓・日の敬語の違いに注目）などについて詳しく学ぶ。文法を修得するためにテキストに従い各種練習問題をこなしながら、随時、簡単な読み物を読み、韓国人やその文化への理解を深める。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	韓国・朝鮮語	応用韓国・朝鮮語Ⅰ	基礎の完成と運用能力（「読む」「書く」「聞く」「話す」）の向上を目指す。韓国・朝鮮語の基礎的な理解力、及び運用能力の養成を目標とします。授業内容としては、テキストをもとに、用言の活用など基本文法の習熟と口頭表現力、聴解力、文章の読解力、作文能力等を養成していく。正確な発音を身につけるためには初期の学習から必ず音声教材を用い、日本語にない発音を単語、語句、文章を覚える際に意識して練習することが必要になる。	
			応用韓国・朝鮮語Ⅱ	さらなる運用能力（「読む」「書く」「聞く」「話す」）の向上を目指す。「応用韓国・朝鮮語Ⅰ」の授業内容の継続で韓国・朝鮮語の基礎知識を確実なものとし、さらに語学力を向上させることを目標に授業を行う。用言の活用の変化の習熟に重点を置き、活用形のうち連用形、連体形をベースにした様々な表現の作り方、使い方に慣れ親しむことをポイントにする。演習に積極的な参加を促すことで、読み聞きを通じた理解力だけでなく、会話の実践感覚をも向上させ、究極的に韓国・朝鮮語能力全体に磨きをかける。	
			総合韓国・朝鮮語Ⅰ	ハングルの読み書きができ、韓国語の基礎を終えた学習者を対象に、韓国語で日常コミュニケーションをとるうえで必要な語彙・文法表現を学習する。具体的に、場面（値段を聞きものを注文する場面、交通手段の利用・道案内する場面など）に応じて必要な語彙・文法表現を修得し、また2～3人が一組になって練習するなどして、韓国語コミュニケーション能力を向上させる。さらに、テキストの内容だけではなく、韓国の人々の生活や文化についても知識を深める。	
			総合韓国・朝鮮語Ⅱ	「総合韓国・朝鮮語Ⅰ」の授業内容の継続で、韓国語で日常コミュニケーションをとるうえで必要な語彙・文法表現を学習する。具体的に、場面（相手に提案する場面、相手を誘う場面など）に応じて必要な語彙・文法表現を修得し、また2～3人が一組になって練習するなどして、韓国語コミュニケーション能力を向上させる。さらに、テキストの内容だけではなく、韓国の人々の生活や文化についても知識を深める。リスニングとスピーキングを習得するため、CDも活用する。	
	ポルトガル語		入門ポルトガル語Ⅰ	愛知県三河地区及び静岡県浜松地区においてはブラジル人が多く働いている。このため、この地域の多方面において活躍することが期待される人材には、ポルトガル語の基礎知識が必要となることも多い。入門ポルトガル語では、最初に、視聴覚機器を利用しながら発音を中心に学ぶ。日本語とは異なる文字と発音との関係について正しい理解をした上で、数字・時間・曜日・日付などの基本語彙について学んでいく。ポルトガル語における文字、アルファベット、発音及びアクセントからはじまり、数詞、時間、日付、指示詞、所有代名詞、単数形・複数形、形容詞、前置詞、疑問詞、動詞の活用法等、一つのフレーズを作成する為のパーツを一步步つ学びながら基礎的語学能力を身につける	
			入門ポルトガル語Ⅱ	「入門ポルトガル語Ⅰ」のポルトガル語の文字と発音練習を基礎として、いろいろな場面における簡単な会話を練習する。日常での挨拶、買い物でのやりとり、レストランでの簡単な注文など場面設定を行い、発音・ヒアリング・読みの訓練を行う。さらに進め、天気・季節に関する表現、家族の者を指すときの表現、身体・心理状態の表現、依頼の仕方、許可を得る・与える表現などについても学びを進める。練習だけに終わらないように、ブラジルや時にはポルトガルの文化の紹介なども行う。	
			基礎ポルトガル語Ⅰ	ポルトガル語の基礎を学ぶ上で、ポルトガル語の文法は不可欠である。ポルトガル語はインド・ヨーロッパ言語族イタリック語派に属す。したがって、最初は、ポルトガル語の言語的特徴について学ぶ。特に、主語と動詞（過去形・現在形・未来形）、主語と動詞（人物以外の主語のとき）、主語と動詞（進行形）などを中心に、テキストに従い各種練習問題をこなす。また、これらの文法事項を定着させるために、時には簡単な読み物を読んだり、簡単な映像を鑑賞したりする。	
			基礎ポルトガル語Ⅱ	「基礎ポルトガル語Ⅰ」で、文の根幹である主語と動詞について学んだ。「基礎ポルトガル語Ⅱ」では、疑問詞、名詞及び形容詞、指示詞、所有代名詞などから、少し高度な文法事項について説明し、テキストに従い各種文法練習問題をこなしながらの定着を図る。簡単な発話もできるようにする。また、「基礎ポルトガル語Ⅰ」と同様、簡単な読み物や映像の生きたポルトガル語の場面を参考に、文法事項の定着を図る。さらには、その言語を話す人たちやその文化への理解を深めることまでを目標とする。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	日本語	日本語・表現Ⅰ	外国人留学生履修科目。自己表現活動を通して自己実現を図ることを目的とする。そのためには、キャンパスでの講義を理解するための日本語の読み・書きの能力だけでなく、キャンパス外でも、異文化接触体験を通して自己を確立する能力を培っていくことも狙いとする。従って、授業で扱うトピックは現実社会を反映したものを選定し、内容をしっかり深めた上で、インターアクション活動が可能となるよう展開していく。外国人留学生にとって日本語は外国語ではなく、まさに生活言語そのものである。この観点から少数授業を保证していく。	
			日本語・表現Ⅱ	外国人留学生履修科目。自己表現活動を通して自己実現を図ることを目的とする。「日本語・表現Ⅰ」に継続して基礎文型とその応用文型を体系的に学習する一方で、秋は特に各授業のレポートや論文作成に対応できるよう、日本語の書く力を重点的に身につけていくことを図る。教材以外のトピックとしては、新聞記事を各自が選定し、その内容の理解を深めることによって、感想文を書くことを義務付ける。さらに、新聞の論旨や自分の意見をクラスで発表し、クラス内討議へと発展できるレベルにまで高める。	
			日本語・論文技術（基礎）Ⅰ	外国人留学生履修科目。大学が提供する多様な講義・演習科目から、高度な情報や知識を的確に得ることができるよう、論理的思考に基づいたアカデミック・リテラシーの獲得を目指す。そのために論理的な文章を大量に徹底的に読みこなす。同時に、文法能力の基礎固めも行う。春学期は、特に、文法項目としては、「助詞」「形式名詞」「複合動詞」など日本語独自の特色ある部分を確認する。また、文章の構成力拡充のために、「句読点」「記号や符号」「段落わけ」などもタスク活動を通して学習していく。	
			日本語・論文技術（基礎）Ⅱ	外国人留学生履修科目。「日本語・論文技術（基礎）Ⅰ」同様、大学が提供する多様な講義・演習科目から、高度な情報や知識を得ることができるよう、論理的思考に基づいたアカデミック・リテラシーの獲得を目指す。そのために論理的な文章を大量に徹底的に読みこなす。同時に、文法能力も発展的体系的に獲得する。具体的には、「日本語・論文技術（基礎）Ⅱ」では、主・術の関係や、文の構成、接続語関係、論文の構成など、文、文体、文章、談話単位などの枠組での日本語の姿を捉える。日本語力の低い学生への補充指導もあわせて行う。	
			日本語・総合Ⅰ	外国人留学生履修科目。1年次の「日本語・表現Ⅰ・Ⅱ」授業を発展させる。まず第一に、テキスト・資料を使って、アカデミックなレベルでの論理的表現の修得を体系的に目指す。同時に、様々な投げ込みタスクを通して、日々の生活において、自己の置かれている状況を説明し、自らの手で問題解決にあたることのできる社会的総合的な日本語力も養う。また、各自の興味・関心をもった社会的テーマでアンケート活動をし、それを、レジュメ（グラフを含む）にまとめて、発表しクラス内討議に持ち込む。	
			日本語・総合Ⅱ	外国人留学生履修科目。「日本語・総合Ⅰ」に継続して、論理的表現の修得並びに発表能力を高めることをめざす。まず、テキスト・資料から、アカデミックなレベルでの論理的表現やグラフの説明・分析の表現を拡充する。同時に、秋学期も、様々なタスクを通して、日々の生活において、自己の置かれている状況を説明し、自らの手で問題解決にあたることのできる社会的総合的な日本語力も養う。必修日本語として最後のセメスターであることから、資格試験に挑戦することも促す。	
			日本語・論文技術（応用）Ⅰ	「日本語・論文技術（基礎）Ⅰ・Ⅱ」で獲得した論理的な文章のリーディング・リテラシーをさらに磨いていくだけでなく、書くためのスキルの向上も徹底する。特に「文体」「文作法の技法」「文構成」の分野で「日本語・論文技術（基礎）Ⅰ・Ⅱ」で修得したことが定着するよう図る。同時に日本語の文法体系を応用・実践できるよう確かなものに高めていく。また、要約やレジュメ作りの基礎も固めていく。夏の長期休暇等にも課題を出し、授業のない期間でも日本語で思考しコミュニケーションすることを日常化させ、秋学期にその復習をし、定着を図る。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	日本語	日本語・論文技術（応用）Ⅱ	1年次の「日本語・論文技術（基礎）Ⅰ・Ⅱ」で獲得した論理的な文章のリーディング・リテラシーを引き続き磨いていくだけでなく、書くためのスキルの向上も徹底する。特に文系理系の論文を各種読ませ、科学的で客観的な文章が書けるよう導く前段とする。例年そうであるが、「日本語・論文技術（基礎）Ⅰ・Ⅱ」で修得したことが充分定着していない点も多々みられる。学生の弱点を洗い出し、その克服に向けて重点的に対処することも必要と考える。そのために、毎時テーマを決めて書かせ、各自の自律学習を促す。	
			アカデミック日本語Ⅰ	アカデミックな文章力と構成力を身につけ、論理的な発表ができるようにする。特に、パワーポイントを活用し、「説明のためのスピーチ」「意見表明のスピーチ」「提言のスピーチ」などのスピーチ力やレジュメ作りを重点的に行う。適宜、資料を配布し、先行研究や先輩の研究に学びながら、自らのテーマを自らが説明し提言していく方向を模索させる。発表後の討議にも一定の時間を割り、他からの意見から学び取る姿勢、国が異なる学生の価値観等にも触れることができるよう授業を組み立てる。	
			アカデミック日本語Ⅱ	アカデミックな文章力と構成力を身につけ、一定の分量の論文・レポートが正確に書けるようにする。そのために、テーマ設定をどのようにするか、また、文体や文構成のために何が必要か、多種の資料を読み合わせタスクも併用しながら、深めていく。また、一人ひとりが実際に論文を書く前に、レジュメ（目次）と「序文・はじめに」を作成しクラス内で討議させる。過不足を相互に補い合うことによって、説得力のある論文が組み立てられることを目指す。	
			ビジネス日本語Ⅰ	異文化下で生きる能力を主体的に確立させるための支援、具体的には就職などのキャリア支援の科目である。待遇表現やビジネス場面での適切な表現を実践的に学ぶ。地域や社会の構成員として日本人との相互作用を経ながら、自由で的確な表現力を身につけ、自己実現を図っていく。その基盤となるよう多様なシチュエーションを準備しコミュニケーション力の伸長を図りたい。DVDや実際のテレビ番組からの教材も活用する。「ビジネス日本語Ⅰ」では、敬語やそれを用いる時に役立つ「クッション言葉」なども取り入れる。	
			ビジネス日本語Ⅱ	日本という異文化下で生きる能力を主体的に確立させるための支援、具体的には就職などのキャリア支援を授業の重点ポイントとする。そのため、待遇表現やビジネス場面での適切な表現を実践的に学ぶ。具体的には、電話のかけ方や訪問、依頼、断り、アドバイス、アポの変更などの各場面でロールプレイをやってみる。さらには、DVDを見たり、就職活動をしている上級生の話を聞いたり、あるいは、企業訪問用のメール作成の作業などを通し、日本社会で協働できる力を身につけさせる。	
	外国語理解		世界の言語Ⅰ	第1外国語および第2外国語として位置づけられている言語以外の言語（ポルトガル語、ロシア語）に関して学ぶ機会を確保するために設定された科目である。専門研究の面から特異な言語の知識が必要となることもあるだけでなく、言語的および文化的な面から知的興味としても多くの言語を学ぶことはきわめて有意義である。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解くことや、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、言語の習得をはかる。	
			世界の言語Ⅱ	第1外国語および第2外国語として位置づけられている言語以外の言語（ポルトガル語、ロシア語）に関して学ぶ機会を確保するために設定された科目である。専門研究の面から特異な言語の知識が必要となることもあるだけでなく、言語的および文化的な面から知的興味としても多くの言語を学ぶことはきわめて有意義である。「世界の言語Ⅰ」を基礎として展開する。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解くことや、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、言語の習得をはかる。	
			ラテン語Ⅰ	現在ラテン語はいかなる国においても母語として用いられてはいないものの、欧米の諸言語の中にはその痕跡が色濃く残されており、ラテン語の知識はこうした現代語の仕組みを知る上で、大いに役立つ。本講義では、ラテン語の文字や基本文法およびその文化的背景などについて学ぶ。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解くことや、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、言語の習得をはかる。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	外国理解	ラテン語Ⅱ	現在ラテン語はいかなる国においても母語として用いられてはいないものの、欧米の諸言語の中にはその痕跡が色濃く残され、ラテン語の知識はこうした現代語の仕組みを知る上で、大いに役立つ。本講義では、「ラテン語Ⅰ」を基礎として、文字や基本文法およびその文化的背景などについて展開する。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解くことや、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、言語の習得をはかる。	
			ギリシャ語Ⅰ	西洋文化を理解するうえで、古代ギリシャおよび古代ローマについて学ぶことはきわめて重要である。そして、それらの古典言語の知識はそれぞれの文化を理解するためには不可欠である。本講義では、ギリシャ語の文字や基本文法およびその文化的背景、新約聖書をギリシャ語原文で読む。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解くことや、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、言語の習得をはかる。	
			ギリシャ語Ⅱ	西洋文化を理解するうえで、古代ギリシャおよび古代ローマについて学ぶことはきわめて重要である。そして、それらの古典言語の知識はそれぞれの文化を理解するためには不可欠である。本講義では、「ギリシャ語Ⅰ」を基礎として、新約聖書の講読、文化的背景などについて展開する。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解くことや、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、言語の習得をはかる。	
			海外セミナーⅠ	本学は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏において、海外短期語学セミナーを主催している。セミナーにおいては単に語学研修を行うだけでなく、学生が各国の歴史や文化に触れ、国際的な視野と教養を高める絶好の機会である。そのセミナーに出席し、その事前の授業およびその報告をもって学修成果を認定する本科目は、Ⅰ～Ⅳまで設定されている。上記英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏のセミナー参加による単位認定を行う。	
			海外セミナーⅡ	本学は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏において、海外短期語学セミナーを主催している。セミナーにおいては単に語学研修を行うだけでなく、学生が各国の歴史や文化に触れ、国際的な視野と教養を高める絶好の機会である。そのセミナーに出席し、その事前の授業およびその報告をもって学修成果を認定する本科目は、Ⅰ～Ⅳまで設定されている。上記英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏のセミナー参加による単位認定を行う。	
			海外セミナーⅢ	本学は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏において、海外短期語学セミナーを主催している。セミナーにおいては単に語学研修を行うだけでなく、学生が各国の歴史や文化に触れ、国際的な視野と教養を高める絶好の機会である。そのセミナーに出席し、その事前の授業およびその報告をもって学修成果を認定する本科目は、Ⅰ～Ⅳまで設定されている。上記英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏のセミナー参加による単位認定を行う。	
			海外セミナーⅣ	本学は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏において、海外短期語学セミナーを主催している。セミナーにおいては単に語学研修を行うだけでなく、学生が各国の歴史や文化に触れ、国際的な視野と教養を高める絶好の機会である。そのセミナーに出席し、その事前の授業およびその報告をもって学修成果を認定する本科目は、Ⅰ～Ⅳまで設定されている。上記英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏のセミナー参加による単位認定を行う。	
			外国理解Ⅰ	英語圏、ドイツ語圏、フランス語圏、中国語圏、韓国語圏、タイ語圏の大学に留学し、修得した単位を認定する。本学の長期留学制度には、本学と海外の大学との学生交換協定に基づく「交換留学制度」と、学位授与権を有する外国の大学の正規の課程に留学を希望する学生が所定の手続きを行い、所属学部教授会で許可を得て留学する「認定留学制度」がある。この制度に基づき、留学先大学で修得した単位を、本学規程に則り、Ⅰ～Ⅳまで設定した科目として認定を行う。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	外国理解	外国理解Ⅱ	英語圏、ドイツ語圏、フランス語圏、中国語圏、韓国語圏、タイ語圏の大学に留学し、修得した単位を認定する。本学の長期留学制度には、本学と海外の大学との学生交換協定に基づく「交換留学制度」と、学位授与権を有する外国の大学の正規の課程に留学を希望する学生が所定の手続きを行い、所属学部で教授会で許可を得て留学する「認定留学制度」がある。この制度に基づき、留学先大学で修得した単位を、本学規程に則り、Ⅰ～Ⅳまで設定した科目として認定を行う。	
			外国理解Ⅲ	英語圏、ドイツ語圏、フランス語圏、中国語圏、韓国語圏、タイ語圏の大学に留学し、修得した単位を認定する。本学の長期留学制度には、本学と海外の大学との学生交換協定に基づく「交換留学制度」と、学位授与権を有する外国の大学の正規の課程に留学を希望する学生が所定の手続きを行い、所属学部で教授会で許可を得て留学する「認定留学制度」がある。この制度に基づき、留学先大学で修得した単位を、本学規程に則り、Ⅰ～Ⅳまで設定した科目として認定を行う。	
			外国理解Ⅳ	英語圏、ドイツ語圏、フランス語圏、中国語圏、韓国語圏、タイ語圏の大学に留学し、修得した単位を認定する。本学の長期留学制度には、本学と海外の大学との学生交換協定に基づく「交換留学制度」と、学位授与権を有する外国の大学の正規の課程に留学を希望する学生が所定の手続きを行い、所属学部で教授会で許可を得て留学する「認定留学制度」がある。この制度に基づき、留学先大学で修得した単位を、本学規程に則り、Ⅰ～Ⅳまで設定した科目として認定を行う。	
	数理・情報分野		教養数学	高校時代までに学ぶ数学が多彩な内容であることから、数的事項の「理解」ではなく「記憶」に頼る学習になっている学生も多い。結果的に社会人基礎力として必要と思われる数学的能力が不足し、企業側はその素養を試す SPI 検査などを課すようになってきている。この講義では、そうした素養を一定の時間をかけて多くの問題を解くことにより、数学に対する苦手意識を払拭し、論理的に考える能力を高め、社会人として必要な数学力養成を目指す。	
			数理科学	「基礎数学への招待」と「カオスと暗号」との2つのテーマを掲げて学習する。前者は、高校の数学を復習した上で、指数・対数、三角関数と微分・積分の初歩的な部分を学習する。後者は、最初に社会現象や自然現象を記述し解明する観点に立ちカオスを扱い、その後で、社会のセキュリティの基礎となる暗号を扱い、暗号技術及びその背景にある数学、また暗号が応用されている身近な分野について解説し、基礎となる数学的手法の理解を目指す。	
			確率入門	確率は天気予報のような日常生活にも登場する数学的概念であり、文系、理系を問わず基礎知識としてその重要性は高い。この講義では、まず、代表的な確率的問題を紹介し、確率についての思い違いや確率の意外な結果などをみる。次に、順列と組み合わせに関する学習を基に、具体例を示しながら確率の定義と基本的な性質について解説する。さらに、確率変数と確率分布および大数の法則について解説する。また、時間が許せば保険金融数学とのつながりをも考察したい。	
			統計入門	コンピュータ、インターネットの発達により、社会的事象に関する様々な情報を収集、分析することは以前に比べ格段に容易になっている。どのような仕事に就いても、データやグラフを読み取り、分析する能力、新聞、ニュースで報じられる統計やグラフの意味の理解力、自分の考えを理解してもらうために統計による客観的情報を示しての発表、説得する能力が必須である。統計データとは何かという根本的問題から始め、データ加工、分析の方法について解説する。	
			情報倫理	「情報倫理 (Nethics)」は、ネットワーク (Network) を介して情報を扱う上で必要とされる倫理 (Ethics) のことを指している。この講義では、私たちが住むネットワーク社会において、高度情報化社会における一人として、我々が守るべきルール、モラルおよび技術について、学ぶ。また、ネットワーク社会における危険とその回避方法についても学ぶ。ネットワーク社会を生きるために必要な倫理、及びその基礎理論・知識を獲得し実践できることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	数理・情報分野	マルチメディア表現	デジタルメディアを活用した表現技法を学ぶ。授業では、指定したテーマにしたがって、情報を画像や動画、音声などのメディアを通して効果的に表現し、そのメッセージを伝達する手法を身につける。特に、身近なデジタル機器である携帯電話やデジタルカメラ、デジタルビデオ等を取り上げ、その特性を生かした活用方法を考える。情報を表現し、伝達するメディアとして、Web ページを作成し、情報化社会におけるマルチメディア表現技法を修得する。	
		ネットワーク演習	パーソナルコンピュータなどの情報メディア機器と情報ネットワーク技術を理解し、その特性をいかした利用を図る。インターネット接続などの基本設定のほか、電子メールなどのネットワークアプリケーションの仕組みを学ぶとともに、実際の接続や利用に関わるトラブル対策により、情報メディア機器を考え、表現する自らの道具として使いこなせる技術の修得を目指す。あわせて、著作権などの法律知識とともに、情報社会におけるモラルと具体的なセキュリティ対策を身につける。	
		社会データ分析入門	パソコンを利用した国勢調査データの処理手法を学習する。まず、インターネットから国勢調査データの入手方法を紹介する。次に国勢調査データを処理しながら、Excel の基本操作、統計処理とグラフ作成の基本技法を学ぶ。最後は、グループごとに三遠南信地域における市区町村の国勢調査データを分析し、地域の人口、経済、産業、文化、社会などを含めた特徴や問題点をまとめ、プレゼンテーションを行う。地域研究に活かせるデータの収集・分析能力を身に付ける。	
		プログラミング	コンピュータを利用するための応用技能であるプログラミングを取得する演習である。前半は、プログラムを理解するために、プログラム構文を学習し、簡単なアプリケーションを事例にしてプログラムでどのようにコンピュータを動作させることができるかを体験する。後半では、機能を連携させ簡単なアプリケーションを作成し、プログラムの外観を理解するとともに、論理的にアプリケーション作成を体験する。プログラミングの基本的な流れを身につけることで、他のプログラミング言語の習得にも応用できる素養を磨く。	
		情報の科学	文字・画像・音声・動画など、情報そのものの形式を学習する。現代の情報はデジタルデータとして表現されることが多く、データを扱うための道具であるコンピュータのしくみについて電気・半導体・論理演算などから理解を深め、情報の物理的形式からデジタル形式への変換方法を学ぶ。文字データについては、アンケート調査の自由記述の分析を通して、正規表現によるパターン一致・キーワードの抽出・文献間の差異の数量化など、形式だけでなく、その操作も学習する。	
		情報と社会	主にインターネットを素材とし、社会の三つの側面から情報との関係を学ぶ。第一に経済的側面、具体的にはネット広告の手法と収益構造、評判システムの役割などを学ぶ。第二に法的側面、即ち知的所有権、個人情報保護、ネット犯罪などをとりあげる。第三に人的側面、つまり人間関係の密度・中心性・中心性形成理論などを学ぶ。講義を通し、情報を作りだしている社会を利益と規制の両面から把握し、社会を構成する人間の組織を科学的に理解し、情報を受信・発信する際に主体的に判断できる能力を養うことを目標とする。	
		情報総合演習	コンピュータによるデータ処理と情報表現の手法を学び、スキルの向上を目指す。単にコンピュータの操作方法を修得するだけではなく、コンピュータによるデータ収集、データ処理、データ表現に関する知識と技能を向上させる。ワードによる文書作成方法、エクセルを用いた統計データの処理方法、さらにエクセルの図表やプレゼンテーションツールを用いた情報の表現手法を身につける。学習や研究の道具としてコンピュータを有効かつ総合的に活用できるようになることを目標とする。	
	自然分野	物質の科学	「化学物質と毒性」と「究極の物質とは何か」をテーマに学習する。前者のテーマのクラスでは、問題となる化学物質による環境汚染や健康危害の現状を紹介すると共に、それらの原因と推測されている化学物質の性質、開発の目的、毒性評価等について解説する。後者のテーマのクラスでは、物質についての現在の自然科学での理解とそれに至った自然現象・考え方について解説する。究極の物質とは何か、どういう現象・実験や考え方から現代の物質観が形成されたかを考えてみる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	自然分野	地球の科学	われわれ人類と生物の住処である地球は、太陽系の中でも特異な惑星である。この星には、液体の水をたたえた海があり、生命を宿している。46 億年という悠久の歴史の中で、さまざまな偶然と必然とが絡み合っ て、現在の地球ができあがった。宇宙と地球の関係、地球の構成、起源 や進化について学び、躍動する地球の姿を知る。そして、その絶妙なバ ランスの上に立った地球システムの理解を通して、現在の地球環境問 題の本質に迫る。資料を参照しながら、高度な数学や科学の知識が無く ても理解できるように解説する。	
		宇宙の科学	夜空を見上げているだけでは想像もつかない宇宙での様々な現象の存 在やその物理・化学機構が、宇宙の観測とこれまで確立した自然科学の 諸法則を駆使して、次々と明らかになってきている。宇宙の科学を題材 に、現代の宇宙像を学ぶと共に自然科学のアプローチ・考え方を学ぶ。 50 億年後の太陽はどうなっているか、地球の将来は、ブラックホール とは何か、暗黒物質とは何か、宇宙の始まり・ビッグバン・宇宙の進化 とは、等宇宙科学全般を広く紹介する。	
		生命の科学	生きていることの科学をテーマとする。20 世紀半ば以降大きな進歩を 遂げた遺伝子研究分野では、特に DNA 組換え技術や細胞操作技術の発 展により、生命現象をミクロな分子レベルで解明することが可能とな った。さらに、21 世紀我々が直面するであろう様々な問題、たとえば 環境、エネルギー、食糧、医療等に解答を見出す可能性を秘めている。 本講義では、生命活動の科学的基礎知識の学習に基づき、安全で健康な 生活とは何かを、科学的論理的に分析・思考ができる科学的素養の習得 を目標とする。	
		環境の科学	環境は地球誕生以来、生命を、生物を、そして、人類を育んできた。そ れらの混然一体とした共同体は、地球上で様々な特徴をもつ生態系を 形成し、人類とともにあってから後は、互いに作用を及ぼしつつ歴史と 文化を創り上げてきた。ここでは、多様な生態系を特徴づけている環境 構成要素とそれぞれの関わり、さらに、人類の働きかけと人類への影響 について、地域および地球スケールで物質循環に焦点を当てつつ、私た ちの社会の持続的発展に向けての環境との付き合い方を探求する。	
		科学技術史	現代の科学技術文明は、人類の歴史の中で、数限りない発見や発明の結 果としてつくりあげられてきた。人類は旧石器時代より、自然を利用す る中で、経験によりそれを理解した。さらに、それを理論化・体系化す ることによって自然科学が生まれた。現代の科学技術は、17 世紀に成 立した近代科学の発展・拡大したものである。古代から現代にいたるま で、自然がどのように理解されかつ利用されてきたかについて解説す る。自然科学や数学の知識は前提としないが、世界史、哲学や宗教につ いての初歩的な理解が必要である。	
		現代技術と社会	テーマは「現代技術の利点と弊害」である。我々の生活の中には多くの 技術が利用されている。もし車が無かったら、もしテレビや冷蔵庫が無 かったら、我々の生活はどのように変化するであろうか。困ることは 何か。良くなることは何か。現代技術が我々にもたらす利点と弊害につ いて考えてみる。日常生活における幾つかの技術を取り上げ、技術の原 理、技術を必要とした背景、技術の社会への影響について考えてみる。 また、水力・火力・原子力・太陽エネルギーなどのエネルギー技術に関 して解説する。	
		地球環境問題	地球環境問題が人類にとって最大の課題であることは言うを俟たな い。悠久の地球史の中で培われた地球環境が、人類の出現とその活動に よっていかに変質され破壊されてきたかを概観し、直面する環境問題 について、その実態と原因について解説する。これらを地球システムの 観点から見ると、どのようなことがいかに関連して生じているのか、科 学的にとらえる視点が得られるようにする。さらに、人類と自然との共 存はいかにして可能か、新しい社会システムのあり方と環境保全への 道を模索する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	自然分野	自然環境と地理	古来、人間は、自然環境と深く関わりながら生産活動を行ってきた。しかしながら、生活の豊かさ・便利さを求めて、人間は自然環境を改変してきた結果、地球環境や地域環境に不都合が生じてきた。そこで、自然環境の仕組みとその地域的差異について自然地理学から考察した後、具体的環境問題である「水問題」を論ずる。水を対象に選んだ理由は、水が自然環境のあらゆる要素に関わっており、自然環境を理解する上で最も重要な存在だからである。自然と人間活動との関係性について、水文環境や森林環境を中心に日常生活の様々な事例を取り上げながら学び、地球環境問題の解決策について考える。	
		動物行動学	動物行動学は Ethology の和訳であり、ヒトを含む動物の行動を研究する学問である。この和訳からは、動物の面白い行動が博物学的に扱われる簡単な学問が連想されるかもしれない。実際には、動物行動学は、全く異なる動物種による様々な行動の背景にある「適応」と「進化」、言い換えれば、それぞれの動物個体の遺伝子が効率よく残るように働く一貫した原理を中心に展開される体系的な学問である。本講義では、具体的な動物行動の事例を取り上げつつ、動物行動学的な考え方と現代の人間社会との関連についても考える。	
		健康科学	健康を理解することは、人間の生命や生活を理解することに通じる。身近な健康問題をわかりやすく説明するとともに、健康管理のあり方を解説する。学生自身の生命・生活を健康という観点から見直すチャンスとすることを第一のねらいとしている。健康観の歴史的変遷と現代的健康の定義（人間にとって生と死、生涯とは何か）、日本人の傷病構造（生活習慣病の基礎知識）を学ぶとともに、健康的な食行動（栄養の基礎、望ましいダイエットのすすめ方）、スポーツ行動、休養行動、嗜好品の愛好行動（喫煙・飲酒行動のメカニズム）等を理解する。	
		スポーツ工学	スポーツを含む身体運動だけでなく、用具・施設等の特性や人間とのマッチング、環境がスポーツ活動に与える影響等を、機械力学や振動理論、制御理論、流体力学、材料力学等、従来工学の分野で用いられていた研究手法をスポーツに適用した研究分野がスポーツ工学である。理論を理解するために必要な力学や数学を説明するとともに、人間の特性を踏まえた用具開発や安全性の検討、実験・測定とシミュレーションによる新しいスポーツ技術の可能性、工学分野からみた人の動きの効率性などを実際のスポーツ場面に当てはめながら解説する。	
		トレーニング科学	基本的な身体の構造を学びながら、トレーニングの原理や一般原則ならびにスポーツパフォーマンスを高めることを狙いとした各種トレーニングの方法論を概説する。また、健康増進を目的としたトレーニングの方法論を概説する。さらに、トレーニング効果を高める多角的アプローチ法として、メンタルトレーニングやスポーツ栄養についても触れる。そして、トレーニングの対象となるヒトに関する生物学的基礎を学びながら、様々なトレーニングに関する目的・方法・特殊性及びトレーニング効果などについて理解を深める。	
	社会分野	歴史学	最初に、歴史学の意義や史料論・時代区分論、歴史観について学習する。その上で、地域別・時代別に展開することになる。具体的には、日本の原始時代・近世・近現代や、大航海時代・ヨーロッパ植民地時代の東南アジアなどについて、諸史料を基に、それぞれのテーマを設定して、各地域・各時代の社会の在り様を検討する。これらの検討を通じて歴史・文化の多様性を認識し、そのことを受容できる人間性を構築することがねらいである。	
		考古学	大地に遺る過去の人間活動の痕跡から、当時の人々の生活の在り様を考察する。具体的には、東西日本の交流点として特有の地域的特色をもつ東海地方の旧石器から縄文・弥生・古墳・古代にかけての遺品や発掘調査によって明らかになりつつある古代中国文明について学習する。考古学の発展は近年著しいので、新しい考古学の成果を紹介し、そのことを通じて正しく現状を捉えることができるようになることを目標とする。考古学の取り扱う豊かな物質的資料に基づいて、文明とは何かを考えて行きたい。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	社会分野	地理学	自然と人間の関係を総合的に考察することを目的とする。特に、地域間格差や民族対立、地球環境問題が深刻化している現代社会において、人口・農業・災害など様々な地理的事象の特徴とその諸問題を多様な側面から取り上げ、現代社会の諸問題を地理的側面から把握するとともに、地理学の基礎的な理論を理解する。「地理統計要覧」や地図帳などビジュアル的資料を積極的に利用しながら、それぞれのテーマに触れながら環境科学としての地理学の立場で展開する。	
		社会学	社会学は、人と人の関わりについて総合的にとらえ、社会現象に関するメカニズムを実証的に考える学問である。その研究対象や研究領域が多岐にわたるだけでなく、歴史・文化・経済などの諸条件への理解も必要である。授業では、産業化・近代化の進展が西洋や日本の社会システムに与えた影響を産業・経営・職業に焦点をあてて考えることや、現代日本社会の課題となっている、家族関係・未婚と晩婚化・少子化・コミュニケーションとインターネットなど、現代社会に関わる多様な話題を取りあげる。	
		政治学	政治は私たち個人の仕事や暮らしから地域や国家の重大事に至るまで、そのあり様に大きな影響をもたらしている。しかし、いざ「政治とは何か」と問われるとその働きや意思決定の主体や過程は曖昧模糊とし、実態が捉え難い。議会、政党、政権、内閣、首長、大臣、官僚などを要素とする政治システムが、国民の現状や意思をどのように捉え、また、造り出しているのか。そうした政治メカニズムについて、現代の地方、国家はもちろん国家間の政治情勢にも目配りしながら具体例をもとに学び、政治を理解する目を養う。	
		経済学	GDP、物価、失業、為替レート、景気、経済成長、デフレ、国債残高、貿易黒字、株価、投機、環境等々、毎日のニュースには経済用語が飛び交っている。そのときどきの経済状況は、私たちの暮らし、とくに所得、貯蓄、消費、就業等、とも直接関係してくることも多い。しかし経済学は、独特の用語や説明のため、ややもすると面倒くさいイメージがある。本講義では、経済学を専門としない学生にとっても不可欠といえる、経済学の基本知識や経済問題について考え方をわかりやすく説明する。	
		法学	憲法を機軸とした法の体系と内容を概観するとともに具体例を紹介しながら立法と司法の手続きを学び、社会人として必要な法の基礎知識およびその知識を活用するための法的なものの考え方を修得する。さらにそれらを視野に入れながら人間社会のなかで法とはどのような働きをもつのか、また、法は社会と個人とっていかにあるべきかを考察し、法とは単に「決めごと、ルール」だけを意味するのではなく社会や国家の歴史や文化の体现でもあることを理解する。	
		経営学	経営学は、企業を典型とする組織体の構造および行動の原理を明らかにする学問である。経営学入門として、対象としての企業と経営の概念を把握するとともに、株式会社制度や組織、生産システム、人事労務管理、財務管理などについて学ぶ。また、それを基礎として日本における経営や管理の発展とその特質、社会的責任や公正取引といった観点から企業の新たな動きなどについても学習する。経営学に興味をもち、現代において経営学の果たす役割について理解することを目的とする。	
		憲法学	憲法は、国家の基本法である。そこには国の基本的なあり方やしくみが定められている。したがって、憲法について理解することは、主権者である国民にとってぜひとも必要なことである。たとえばプライバシー権、信教や表現の自由、教育権、生存権、死刑制度、平和主義などである。しかし、憲法を学ぶということは、たんに憲法に書かれていることを覚えることではない。現実には生じているさまざまな出来事を憲法に基づいて考えることができるようになることが憲法を学ぶ真の目的である。	
		レクリエーション論	社会生活の豊かさのひとつの指標となりつつある余暇とレクリエーションの意義や、レジャーとの関係を明らかにするとともに、レクリエーション活動の現状について理解を深め、今後の日常生活にレクリエーション活動を活用することができる能力や態度を育てる。また、自然環境活用型レクリエーション、農山村環境活用型レクリエーション、都市自然活用型レクリエーション、公園におけるレクリエーションの基礎と実態を学ぶ。レクリエーションの果たす役割を十分に理解するとともに実践に役立つ能力を養う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	社会分野	ジェンダー論	当たり前で自然なものとなってきた性や様々な性現象を、ジェンダー・センシティブな視点から考察し、ジェンダー理解を深める。まず女と男を二分する性通念を批判的に考察しながら、性の多様性などセクシュアリティ問題を把握する。次に「女らしさ」あるいは「男らしさ」という社会規範に潜む「性別に関する差別と権力」を考察する。ジェンダーとは「社会的・文化的に構築された性差」という一面的な定義だけでなく「すべての人が差別されず、平等に、自分らしく生きることをめざす」概念として理解することをめざす。	
	人文分野	哲学	哲学とはどのような学問なのかについて、その基本的な理解を目標とする。哲学の初学者を対象に、この学問の実際を紹介していく。西洋の代表的な思想と東洋の代表的な思想を、分かりやすく講義する。いくつかの哲学的問題を取りあげ、受講者と共に検討していく中で、哲学という学問が何を、何のために考察するものであるのか、明らかにしていく。この過程で、必要に応じて哲学史の知識も講義していきたい。人文分野における哲学の思考法について一定の理解を得ることが目標となる。	
		論理学	「論理的に正しい」とはどういうことかについて、代表的ないくつかの論理学を実際に修得しながら学んでいく。論理学はすべての学問の基礎であり、どの学問を学ぶにしろ必要不可欠なものである。また、それぞれ異なった視点から、世界のあり方や人間の生き方を考えるものでもある。論理学が世界観と人生観の表現であることを、丁寧に分かりやすく説明したい。具体的には、命題論理・述語論理・名辞論理という代表的な論理学について学習する。	
		宗教学	宗教学は、宗教という文化現象を、構造や機能、歴史などをとおして総合的かつ科学的に考える学問である。宗教の範囲は多岐にわたり幅広く、私たちの日常生活の中にもさまざまな形で浸透している。内容としては、「天地創造」「ブッダ」「最後の誘惑」といった宗教を題材とした映画作品をもとに、そこに登場する歴史的装置、セリフなどのファクターを抽出しながら西洋におけるキリスト教などについて考える。また現代の日本や中国南部・西部の少数民族の信仰の造形をとおして、東洋の諸民族の宗教観念や習俗を考える。	
		心理学	心理学は、人間の心のさまざまな働きと、それにもとづく行動を科学的に研究する学問である。現在の多岐にわたる研究分野や研究領域について、VTRや小デモンストレーション実験、受講生の主体的な参加をうながすグループワークなどを通じて受講生の知見をより深めたい。内容としては、「現代心理学とは何か」にはじまり、脳、言語の発達、感覚と知覚、学習、記憶と忘却、判断と意思決定、などについて考える。結果として、対人関係のあり方にも役立つように配慮する。	
		文化人類学	文化人類学とは、フィールドワークを通じてそれぞれの民族の社会や文化を総合的にとらえて民俗誌としてまとめるとともに、民族誌に描かれたそれぞれの社会や文化の比較をとおして民族性や人間とはなにかをあきらかにする学問といえる。内容としては、文化人類学と民俗学の同差、未開と文明の比較文明論、狩猟採集・牧畜・農耕・都市などの生活様式とその住まい、海山で生きていくための生活技術、婚姻や葬制といった通過儀礼を学習する。	
		現代の思想	現代社会が直面している多くの問題は、哲学的、倫理的な考察を必要としている。たとえば、コンピューターにも心があるか、脳死は人の死か、動物にも権利があるか、クローンはいかに非か、技術とは何かなどがそれである。こうした現代におこっている様々な課題について哲学的に考察するとどうなるのかを、いろいろな哲学的考察議論を紹介しながら学び、こうした問題に対する理解を深めることを目指す。現代的問題について考えるための基本的知識についても学ぶ。	
		民俗学	民俗学は、日本に伝承されてきた、生きていくための生活文化を対象とする。日本の恵まれた海山里の環境のなかで、それぞれの地域の人々がうみだした優れた知恵を学びながら、日本の生活文化の特色や地域性についてあきらかにし、さらには今日的な課題についても考えたい。内容としては、海山里に根ざした地産地消の食文化、隣人ともいえる動物たちと人のつきあいのあり方と変遷、稲を中心とした日本における靈魂観や年中行事、人の一生にともなう儀礼や祭りの意味などを学習する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	人文分野	スポーツ文化論	生活の一部となりつつあるスポーツが文化現象であることを学んでみる。社会・文化現象としてのスポーツ、スポーツの核的要素とその変質、現代スポーツの特質について説明する。また、スポーツの役割と課題について、オリンピックの歴史を概観する中で整理してみる。さらに、現代スポーツが抱える文化的課題について、生涯スポーツ、メディア・スポーツ、教育としてのスポーツ（体育や大学スポーツ）、スポーツ・ジェンダーと今後の課題、プロスポーツの現状と課題（Jリーグとプロ野球の比較）、日本文化としての相撲などを題材に分析してみる。	
		日本事情Ⅰ	母国を離れ生活基盤を置くことになった日本社会を理解してもらうために、外国人留学生に特化した科目として配置し、文化と歴史を重点的にとりあげる。すでに日本滞在歴1～2年を経過した者にあつては、生活面でそれぞれが様々な異文化を体験してきている。また、新たに日本社会に加わったばかりの者もいる。日本の生活、文化や歴史を学習することによって、外国人留学生がいろいろな局面で感得する（した）であろう違和感、疑問、価値観の相違などを、体系的に整理・分析しなおすきっかけとなるものとする。	
		日本事情Ⅱ	「日本事情Ⅰ」に引き続き、日本人との接触面で外国人留学生が体験する（した）数々の軋轢を冷静客観的に判断するために、その背景となっている日本の社会、政治、経済、産業構造のしくみなどを学習する、留学生特化の科目である。カルチャーショックや日本嫌いの意識を克服するきっかけとなるよう日本理解を深め、一人ひとりがスムーズな留学生活が送れるよう支援する。また、日本人との交流、協働によって、将来日本企業で働ける人材、あるいは、出身国との架け橋となる人材を育成していくこともねらいとする。	
		文学	古代から現代に至る日本およびヨーロッパの代表的な文学作品に触れ、解説を交えながら読んだり映画を鑑賞する。日本では『古事記』『万葉集』『奥の細道』、三島由紀夫の作品、西脇順三郎の作品などを取り上げる。また、ヨーロッパでは、古典的なホメロスの作品やギリシャ神話はもちろん、『ベーオウルフ』『カンタベリー物語』シェイクスピアの作品などイギリスのもの、フランスの『赤と黒』『失われたときを求めて』とモリエールの作品などを取り上げる。これらの作品を通じて、時代背景や社会制度などについて学ぶだけでなく、人間の生き方や人間そのものについて深く考える。	
		日本語学	従来の国語教育の枠組みではなく、新しい角度から、世界の諸言語の一つとしての日本語について学ぶ。音韻、表記、語彙と意味、敬意表現を含む言語活動の基礎知識を概括的に獲得し、あわせて、日本語を科学的客観的に分析する能力を養うことを目的とする。この科目を受講することによって、日本語についての新しい世界が拓けると同時に、異文化の隣人との円滑なコミュニケーションの足がかりとすることもできよう。専門的な日本語研究の方法についても論じる。	
		古典の世界	文学で学んだ基礎知識をもとに、古代から近代に至る日本や西洋の代表的な文学作品を読み、より深く古典文学の世界に触れることを目的としている。内容としては、平安時代の『今昔物語集』を読んで説話の面白さ、不思議、滑稽、悲しさなど平安人の心の底を探ったり、近世の『浮世草子』にえがかれた経済事件をとりあげ、現代と比較しながら金銭に翻弄される人間の心を探ったり、『デメロン』の「鷹の話」をとおして短編小説の味わいにふれる。	
		言語と文化	言語と文化がいかにかわるかを具体的に考察し、欧米や中国における言語文化の特徴を知ることによって、日本と日本文化と日本語について考える。大きな3つのテーマとして、ヨーロッパ文化の特徴を表す「多様と統一」ないし「分化と統合」という言葉を導きの糸にしたヨーロッパの言語文化の考察、中国を中心とした漢字及び漢字によって築かれた文化に関する考察、日本語と英語を対照し、その相違点を文化との関わりにおいて論じ、これまで日本人のなかに潜んでいた日本語蔑視の思想に関する考察を行う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	人文分野	芸術論	芸術は、美をうみだすための創造的な活動の総称である。美術・グラフィックデザイン・タイプフェイスデザイン・建築等の芸術家の実践を通して、芸術における自然や自由の意味を考える。また、芸術家の書家・彫刻家・画家、民芸運動家を取り上げ、インスタレーションと保存、見ることと知ること、自然の法則とシステム、美術とデザイン、民族の歴史と美意識、東洋と西洋の空間意識などについて考える。芸術だけでなく、現代社会のさまざまな事象に対する自らの見方を確立する力を養う。	
	総合	総合科目	共通教育科目として開講している各分野科目から得た知識を基礎に、物事を総合的にとらえ考察する能力を養う。 共通教育科目として開講している各分野科目から得た知識を基盤に、物事を総合的にとらえ考察する能力を養う。本科目においては、いくつかのテーマに関する内容の理解とともに、大学生として身につけて欲しい柔軟な理解力、自分の考え・意見をまとめられる能力、意見等を適切に文章化できる能力、聞き手に分かりやすい発表を行える能力、議論・討論を充分に行える能力、文献を調べ、その内容をまとめられる能力等を培うことを目標としている。授業は、eラーニングによる自主学習も交えながら進める。	
		総合演習	大学生として修得すべき能力に、新しい知識を吸収できる柔軟な理解力、自分の考え・意見をまとめられる能力、意見等を適切に文章化できる能力、聞き手に分かりやすい発表を行える能力、議論・討論を充分に行える能力、文献を調べ、その内容をまとめられる能力等がある。個々のテーマに関する内容の理解とともに、上記の中の幾つかの能力を培うことを目標としている。予定しているテーマは、日本語の文章表現の実践に関するもの、テキストの輪読、討論を通して環境問題の科学的検討を行うもの、自然科学の理解を実感できるようなものなどである。	
		キャリアデザイン基礎	将来における「キャリア」という視点から、キャリアプランニングの基礎的考え方や理論などについて学び、適切な社会理解と職業観・勤労観を涵養するとともに、学生時代の学びの目的を明確にさせ、学業に対する前向きな姿勢を醸成する。また、グループワークなどを通じて、学生自身の自己理解力を高め、主体的な取組み姿勢と意欲を向上させ、自らのキャリアプランについて考え、行動する力を養う。これらの学びを通して、学生はより具体的なキャリアプランの描写と実践することができ、その具現化を高める。	
		キャリアデザイン応用	卒業後のキャリアプランを描写・実践するため、他者の知見や経験等を学ぶとともに、現代の日本社会における「キャリア」や「労働」、「就職」が持つ意味を多面的領域から理解することによって、「キャリア」に対する客観的理解と主体的な取組み姿勢を促す。 (オムニバス方式／全15回) (140 森川竜哉／13回) 現代日本社会とキャリアという視点から、その現状や課題、今後の方向性などについて考える。 (140 森川竜哉・123 藤原淳子／1回：共同) 「女性」と「仕事」について考える。 (140 森川竜哉・107 中野菜保子／1回：共同) 「好きなこと」と「仕事」について考える。	オムニバス方式・共同（一部）
		キャリアデザイン特殊講義	企業や地域社会との産官学連携教育や特定分野のキャリア形成に資する講義を展開することによって、進路等に明確な目標と方向性を持っている学生や特定分野に興味・関心のある学生の学習意欲と主体的なキャリア形成姿勢を高めることが講義目標である。これらの学びを通して、学生はより具体的なキャリアプランの描写と実践することができ、その具現化を高める。地域公共人材という考え方を理解でき、地域公共人材像の中に自分のキャリアデザインを関連付けることができることが到達目標である。	
	体育分野	スポーツ・健康演習	現代社会においては、運動不足病、生活習慣病の増加と若年化が大きな問題となっている。受講生自身が体力と健康状態、食生活等を確認・評価すると共に身体運動を積極的に実施するための実戦およびトレーニング・コンディショニング等の知識を身につけさせる。授業の運営は、5名の教員が役割分担し、リレーしながら1クラス6班を回りながら、全班・全クラスとも同じ内容で実施する。（複数クラス開講） (オムニバス方式／全15回)	オムニバス方式・共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	体育分野		A・B クラス (134 宮崎幸子・36 湯川治敏・72 岡本浄実・10 元晶煜・67 伊藤寿浩／3回：共同) 複数班合同で、初回ガイダンス 1 回、レクリエーションスポーツ演習 2 回を実施。 (134 宮崎幸子／2 回) 体力および日常の運動状況を客観的に評価するための体力測定を実施。 (36 湯川治敏／2 回) 食生活を評価し、健康障害に関する知識を学び主体的な健康行動の確立を目指す。 (72 岡本浄実／4 回) 屋内球技とウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 (10 元晶煜／2 回) 屋外団体スポーツとウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 (67 伊藤寿浩／2 回) 屋外個人スポーツとウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 C・D クラス (93 杉町明子・117 稗田睦子・126 松尾浩世・67 伊藤寿浩・10 元晶煜／3回：共同) 複数班合同で、初回ガイダンス 1 回、レクリエーションスポーツ演習 2 回を実施。 (93 杉町明子／2 回) 体力および日常の運動状況を客観的に評価するための体力測定を実施。 (117 稗田睦子／2 回) 食生活を評価し、健康障害に関する知識を学び主体的な健康行動の確立を目指す。 (126 松尾浩世／4 回) 屋内球技とウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 (67 伊藤寿浩／2 回) 屋外団体スポーツとウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 (10 元晶煜／2 回) 屋外個人スポーツとウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 E・F クラス (93 杉町明子・142 安田真奈・67 伊藤寿浩・94 鈴木康博・29 新井野洋一／3回：共同) 複数班合同で、初回ガイダンス 1 回、レクリエーションスポーツ演習 2 回を実施。 (93 杉町明子／2 回) 体力および日常の運動状況を客観的に評価するための体力測定を実施。 (142 安田真奈／2 回) 食生活を評価し、健康障害に関する知識を学び主体的な健康行動の確立を目指す。 (67 伊藤寿浩／4 回) 屋内球技とウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 (94 鈴木康博／2 回) 屋外団体スポーツとウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 (29 新井野洋一／2 回) 屋外個人スポーツとウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。	演習 12 時間 実技 10.5 時間
		スポーツ実技Ⅰ	種目としてバレーボール、バスケットボール、ダンス、ジョギング・ウォーキング、ソフトボール・野球、テニス、ウェイトトレーニング、ゴルフ、テニスの 10 種目程度を開講する。「スポーツ・健康演習」で獲得した運動実践についての基礎的知識・技能をより発展させ、自ら運動に取り組むことができる積極性を醸成し、生涯スポーツへの導入を行う。継続的な運動を行うために、各種目における運動の特殊性、施設用具についての知識、ルール、マナー、チームスポーツの場合にはチーム内の連携、試合の運営など実践力のみでなく、総合的な企画力・行動力を伴うスポーツ実践者の育成を行う。	
		スポーツ実技Ⅱ	種目としてサッカー、バドミントン、卓球を開講するとともに、コンディショニングの一つとしてスポーツ・マッサージを開講し、単なるスポーツ種目にとどまらずより深く人間の身体について学ぶ機会を提供する。スポーツ種目では「スポーツ実技Ⅰ」と同様に、生涯スポーツとして継続的に実施するための知識と実践能力を身につけるのみでなく、運動の特殊性、施設用具についての知識、ルール、マナー、チームワーク、試合の運営などについても学習し、総合的な企画力・行動力を伴うスポーツ実践者を育成する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	学部共通科目	文学部総合研究	この授業では、新入生に対して文学部の全体像を紹介する。新入生を3つのクラスに分け、文学部のテーマである「人間について探究すること」について、人文社会学科3コース8専攻、心理学科1専攻、歴史地理学科3専攻及び日本語日本文学科1専攻から代表の教員が、それぞれ独自の観点から概説する。新入生が文学部の全体像を理解することによって、2年次の専攻選択や卒業までの履修計画にも役立てる。 (オムニバス方式/全15回) Aクラス (15 片岡邦好/2回) 第1回目に3クラス合同講演会開催。図書館・記念会館他学内施設見学及びe-learningの紹介。 (14 樫村愛子/2回) 社会学の紹介とテーマ概説。 (28 永瀬美智子/1回) 英語圏文化・現代国際英語の紹介とテーマ概説。 (18 河合まゆみ/1回) ドイツ語圏文化の紹介とテーマ概説。 (49 中尾充良/1回) フランス語圏文化の紹介とテーマ概説。 (4 和田明美/1回) 日本語日本文学の紹介とテーマ概説。 (2 漆谷広樹・3 平高史也)/1回: 共同) 日本語日本文学の紹介とテーマ概説。 (48 長井千秋/1回) 歴史・地理学の紹介とテーマ概説。 (45 近藤暁夫/1回) 歴史・地理学の紹介とテーマ概説。 (19 木之下隆夫/2回) 心理学の紹介とテーマ概説。 (6 伊集院利明/2回) 現代文化・メディア芸術の紹介とテーマ概説。 Bクラス (15 片岡邦好/2回) 第1回目に3クラス合同講演会開催。図書館・記念会館他学内施設見学及びe-learningの紹介。 (14 樫村愛子/2回) 社会学の紹介とテーマ概説。 (28 永瀬美智子/1回) 英語圏文化・現代国際英語の紹介とテーマ概説。 (18 河合まゆみ/1回) ドイツ語圏文化の紹介とテーマ概説。 (49 中尾充良/1回) フランス語圏文化の紹介とテーマ概説。 (4 和田明美/1回) 日本語日本文学の紹介とテーマ概説。 (1 空井伸一・3 平高史也)/1回: 共同) 日本語日本文学の紹介とテーマ概説。 (48 長井千秋/1回) 歴史・地理学の紹介とテーマ概説。 (45 近藤暁夫/1回) 歴史・地理学の紹介とテーマ概説。 (19 木之下隆夫/2回) 心理学の紹介とテーマ概説。 (6 伊集院利明/2回) 現代文化・メディア芸術の紹介とテーマ概説。 Cクラス (15 片岡邦好/2回) 第1回目に3クラス合同講演会開催。図書館・記念会館他学内施設見学及びe-learningの紹介。 (14 樫村愛子/2回) 社会学の紹介とテーマ概説。 (28 永瀬美智子/1回) 英語圏文化・現代国際英語の紹介とテーマ概説。 (18 河合まゆみ/1回) ドイツ語圏文化の紹介とテーマ概説。 (49 中尾充良/1回) フランス語圏文化の紹介とテーマ概説。 (4 和田明美・3 平高史也)/1回: 共同) 日本語日本文学の紹介とテーマ概説。 (5 藤井貴志/1回) 日本語日本文学の紹介とテーマ概説。 (13 小野賢一/1回) 歴史・地理学の紹介とテーマ概説。 (45 近藤暁夫/1回) 歴史・地理学の紹介とテーマ概説。 (19 木之下隆夫/2回) 心理学の紹介とテーマ概説。 (6 伊集院利明/2回) 現代文化・メディア芸術の紹介とテーマ概説。	オムニバス方式・共同(一部)
		卒業論文	「卒業論文」は、自分の所属する専門分野について、自分でテーマを決め、資料・実地調査を行い、これに基づいた解釈、先行文献との比較を通して、自分なりの結論を導き出し論文を執筆する。提出された「卒業論文」の内容に基づき、論文審査と口述試験を行う。このことで、テーマ発掘力、調査力、資料の解釈・分析力、ものごとを自分なりに考え、新たなものを創造し、表現する力、また自分で導き出したものや創造したものを人前で発表する力、質問や批判に答え、他者と対話する力が養われたかを確認する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育科目	学部 共通科目	入門講義（現代文化）	現代文化コースの諸専攻は、現代文化を深く理解し、その中でよりよく生きていくための、知恵を学んでいく。人間が作り上げ、現代に受け継がれ、また、いままさに現代進行形である、さまざまな思考、文化、また、情報のあり方、そうした現代を生きる我々に直接にかかわる様々な知識を習得していくための基本的なものの見方を習得してもらうことを目標とする。この授業は、複数名の担当教員により連携して運営し、学生を含めて各々の立場から現代文化についての統合的議論を行う。 （オムニバス方式／全15回） （70 宇佐美一博／3回）東アジア文化の特徴、古典、文化交流史の紹介。 （23 下野正俊／3回）「西洋的発想」のパターンと、明治以降の日本への受容。 （53 山本昭／3回）現代的事項の情報学的な見方。 （37 吉野さつき／2回）アートと現代文化。 （56 上田謙太郎／1回）メディアとアート。 （70 宇佐美一博・23 下野正俊・37 吉野さつき・53 山本昭／1回：共同）第8回目に中間的な振り返りと今後の授業進行に関する方向性の確認を行う。 （70 宇佐美一博・23 下野正俊・56 上田謙太郎・53 山本昭／2回：共同）第1回目は、自然科学・社会科学・人文学の方法論、観察、抽象化、理論化、演繹と帰納に関する話をし、最終回は授業の総括を行う。	オムニバス方式・共同（一部）
		入門講義（社会学）	社会学とは「社会」についての学問である。人は生きていくなかで必ず社会の影響を受ける。したがって社会とは、身の周りからはじまり、家族、学校、地域、日本という国、世界の国々まで含め、人間社会の全体まで広い範囲を指す。社会学は、一方で個人の行為の分析をとおして、人間と社会を理解しようとするとともに、他方では社会そのものが個人に及ぼす影響力を解き明かす学問である。この授業では、社会学の基礎的視座を学んだ上で、さまざまな社会現象を考えるための視点を習得することをめざす。	
		入門講義（心理学）	心理学の学問体系を全般的に概説する。そこで、心理学における基礎的な内容を中心に説明していく予定である。心理学については、現代において様々な分野があげられる。たとえば、基礎心理学として位置づけられる感覚・知覚、学習、行動、生理心理学の領域から応用心理学として位置づけられるパーソナリティ、社会、発達、臨床心理学等が該当する。この授業では、心理学研究法の基礎を始め、主にパーソナリティ・発達・臨床・認知・学習心理学等の基礎的な内容について学ぶことを目標とする。	
		入門講義（歴史・地理学）	歴史学や地理学の学習・研究を進めるための入門として、教員が交代で、研究の最先端において課題として示され、学生が興味をおぼえると思われるテーマを選んで講義を行う。さまざまな問題に踏み込んで、これまでの研究の成果や、研究を進めるための方法などについて、具体的な事例や史料をもとに提示する。 （オムニバス方式／全15回） （30 廣瀬憲雄／2回）日本古代史にかかわる特徴的なテーマや事例をもとに講義を行う。 （35 山田邦明／1回）日本中世史にかかわる特徴的なテーマや事例をもとに講義を行う。 （17 神谷智／2回）日本近世・近代史にかかわる特徴的なテーマや事例をもとに講義を行う。 （13 小野賢一／2回）世界史（西洋史）にかかわる特徴的なテーマや事例をもとに講義を行う。 （48 長井千秋／3回）世界史（東洋史）にかかわる特徴的なテーマや事例をもとに講義を行う。 （45 近藤暁夫／5回）地理や地理学にかかわる特徴的なテーマや事例をもとに講義を行う。	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	学部共通科目	入門講義（日本語日本文学）	日本語はどのような言語であろうか。また日本文学にはどのような特色が見られるのだろうか。そのような問題に答えながら、読解・理解力を身に着け、日本語の表現力を培うことを目標に講義を行う。古代から現代までの文学作品や文字資料を読み、実際の表現を分析的に捉えつつ、日本語日本文学研究の世界へと受講生をいざないたい。特に言語感覚を磨き、日本語表現のスキルアップを望む受講生の期待にも応えうる、実践的・参加型の講義を目指す。 （オムニバス方式／全15回） （4 和田明美／7回）日本語の表現、言葉の意味、言葉と心、日本語の成立など、日本語について考える。 （5 藤井貴志／7回）村上春樹作品の中の音楽（ジャズ）、武者小路実篤「友情」、川端康成「伊豆の踊子」、伊藤左千夫「野菊の墓」などの作品を通じて、日本近現代文学について考える。 （4 和田明美・5 藤井貴志／1回：共同）第1回目の授業において、この授業と日本語日本文学に関するガイダンス。	オムニバス方式・共同（一部）
		入門講義（欧米言語文化）	この授業では、欧米言語文化コースの概要と研究対象を知ることによって、各言語の背景にある「世界」を感覚的に理解し、知的に体感する。 （オムニバス方式／全15回） （15 片岡邦好／3回）英語の歴史、世界各地の英語、様々な社会の英語、英語拡散の是非、国際語としての英語について考察を行う。 （28 永瀬美智子／2回）イギリスの文化、アメリカの文化に関する考察を行う。 （18 河合まゆみ／5回）映像を取り入れながら、ドイツ語圏の歴史・文化に関する考察を行う。 （49 中尾充良／5回）フランス映画の鑑賞をしながら、フランス語の歴史と広がり、フランス映画の歴史等を紹介する。	オムニバス
		入門演習（東アジア文化）	本演習では、現代文化に関わるいくつかの興味深いテーマを選び、東アジア文化の一端に触れることを試みる。また、東アジア文化の研究に必要な基礎知識や漢文資料の読解力を身につけることも目標にする。具体的には、漢字の歴史やしぐみについての理解を深め、故事成語を題材に漢語・漢文による資料を講読できる能力を修得していく。同時に、今後の学習に必要な、資料収集、プレゼンテーション・討論、レポート作成といった基礎的なアカデミック・スキルズを習得する。	
		入門演習（哲学）	哲学の初歩を学習する。テキストを精確に読解することは、哲学を学ぶ上で必須の技能の一つである。本演習は、比較的平易な（しかしきわめて重要な）テキストであるデカルトの『方法序説』を題材に、テキスト読解の訓練をする。その上で、以下を目指す。 1 西洋哲学の発想・概念に親しむこと。 2 西洋近世哲学に関する哲学史的な知識の基礎を獲得すること。 3 大学で学ぶ上で必要な、資料収集、プレゼンテーション・討論、レポート作成といった基礎的なアカデミック・スキルズを習得すること。	
		入門演習（図書館情報学）	本演習では、図書館及び情報の社会的関連性を材料に情報収集法、文献探索法を理解し、グループ討議を通して、現代の情報社会の課題と解決法を考察する。そのために、まず講義と基礎的文献の紹介、読解を適宜織り交ぜつつ知識の拡充を図る。このことを通して、図書館情報学の学習に際して今後必要になる基礎知識を獲得する。同時に、さらに学習を進めていく上で必要な、資料収集、プレゼンテーション・討論、レポート作成といった基礎的なアカデミック・スキルズを習得する。	
		入門演習（メディア芸術）	メディア芸術専攻では、ワークショップ（参加体験）型の実習授業を中心に、自らの体験を通して映像と身体表現を中心としたアートを知り、アートマネジメントやアートと社会の関わりについて考える力を養う。さらに、映像と身体を中心とした表現メディアの可能性を知り、アートとさまざまな異領域をつなぐデザインやプロデュースに必要とされる知識、能力を身につける。本演習は以上のような専攻の教育目標に対する基礎科目であり、今後多面的に展開されることになる実習を効果的に学習するための基礎的な知識とスキルを獲得することを目指すものである。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	学部共通科目	入門演習（社会学）	日常生活は、他人とのさまざまな関係で営まれている。人と人との多様な結合によって、社会は形成されている。社会について考えるため、社会学では多くの概念や学説を考案しているので、社会学を学ぶには、基本的な社会学用語や体系化された学説を知らなければならない。そこで、「入門演習（社会学）」では、身近な社会現象を取り上げ、人間関係の諸特性を社会学の観点から論議しながら、社会学の基本的な考え方を身につける。具体的には、家族・地域・文化・コミュニケーション・ジェンダー・福祉等々、さまざまなテーマについて学習する。	
		入門演習（心理学）	心理学の全般的な学問体系について、演習を通じて概説することを目的とする。そこで、心理学のなかで、主に臨床心理学（うつ病の考え方等）、社会心理学（囚人のジレンマ、社会的信頼、コミュニケーション等）、パーソナリティ心理学、実験心理学（比較心理学、認知機能、記憶、音声コミュニケーション等）の基礎的な内容について学ぶことを目標とする。そして、簡易な実験やワークを通じて体感することによって、上記の心理学の内容について理解を深めることを目標とする。	
		入門演習（日本史学）	日本史の研究を進めるうえで、いちばんの基礎になるのは、文書（古文書）や日記を中心とする文献史料である。対象となるその時代に記録された文献は、当時の社会の現実をとらえるときの、なによりの拠り所になるが、こうした文献の記載内容を正確に読み取るのは簡単ではない。この入門演習では、初年度の学生にも理解しやすい文献史料を提示し、その音読と内容の読解を学生に行わせることにより、史料を読み解く基礎的な能力を養う。 （オムニバス方式／全15回） （30 廣瀬憲雄／5回）日本古代史にかかわる文献史料（テキスト）を用意し、演習を行う。 （35 山田邦明／5回）日本中世史にかかわる文献史料（テキスト）を用意し、演習を行う。 （17 神谷智／5回）日本近世・近代史にかかわる文献史料（テキスト）を用意し、演習を行う。	オムニバス方式
		入門演習（世界史学）	2年次からの専門教育の準備として、外国史に関わる研究の方法と事例について、学生グループによる共同作業を行う。グループごとにテーマにしたがい、レジュメ作成、口頭報告を順次行う。 （オムニバス方式／全15回） （13 小野賢一／8回）西洋史分野を中心にしてグループごとに、例えば「ベルシャ戦争」「ローマ帝政」「百年戦争」「ナポレオン」「ヒトラー」などのテーマについて調査・検討をし、その結果を口頭発表する。 （48 長井千秋／7回）歴史学の入門書をテキストとして、歴史学という学術の特徴と性格、史料、歴史認識、歴史教育、歴史研究の目的などのテーマについて、前半と同じくグループによるレジュメ作成、口頭報告を行う。	オムニバス方式
		入門演習（地理学）	地理学に関係する内容を中心に演習・実習を行う。まずは自分たちが学ぶキャンパスの「地理」と「歴史」を簡単なフィールドワークを通して理解する。その上で、地理学や歴史学の研究において必須となる地図の読解力を簡単な実習で養いつつ、最新のデジタル地図についても理解を深める。さらに、地図を実際に描画してみる。最後には、自分が選んだ地域にかかわる地域資料をまとめ、紹介する演習形式の発表を行う。これらを通して、地理学の基礎的な問題関心と方法論を理解し、2年次以降の専門的な学修への下地を構築する。	
		入門演習（日本語日本文学）	日本語日本文学研究入門としての演習であり、日本語と日本文学に分かれてそれぞれの研究の基礎的内容を目指す。日本語学については、なにげなく使われている日常の言葉について考察・分析し、言葉の変化や話し言葉のゆれ、あいまいな若者言葉などの探求を通して日本語研究の方法を身につける。日本文学については、江戸川乱歩や川端康成、谷崎潤一郎、泉鏡花、澁澤龍彦といった作家を取り上げ、明治・大正から現代にいたる幻想文学に描かれた「人形」あるいは「人形的なもの」を鍵にして、近代文学を論理的に読解する技法を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	学部共通科目	入門演習（欧米言語文化）	この授業は、欧米言語文化コースの 3 つの専攻に関連する言語や文化に触れつつ、その研究分野を学ぶことを目的とする。 （オムニバス方式／全 15 回） A クラス （18 河合まゆみ／3 回）グリム童話を題材として映画化、オペラ化等に関する考察を行う。 （59 コレヤアントニー／4 回）フランスの歴史、フランスと日本の関係、世界のフランス語圏の国々、フランスの日常生活、フランス語の未来と問題等に関する考察を行う。 （57 エイプリルイヴデイ／8 回）国際英語の視点から英語を学習する意味・目的等に関する考察を行う。 B クラス （26 鈴木康志／4 回）身の周りのドイツ語、ドイツの音楽（クラシックと現代のポップス）、ドイツの街並みと環境政策に関する考察を行う。 （57 エイプリルイヴデイ／7 回）国際英語の視点から英語を学習する意味・目的等に関する考察を行う。 （59 コレヤアントニー／4 回）フランスの歴史、フランスと日本の関係、世界のフランス語圏の国々、フランスの日常生活、フランス語の未来と問題等に関する考察を行う。	オムニバス方式
	演習科目	日本語日本文学基礎演習 I A	この授業は日本語日本文学研究の基礎的な知識を紹介し、資料調査の方法、発表資料作成の技術、研究発表を通じて他者に自らの意見を伝えるスキルを習得するための導入となる演習である。 （オムニバス方式／全 15 回） （5 藤井貴志／前半 8 回） 前半の近代文学では、大正期を代表する短編といってよい梶井基次郎の「檸檬」や芥川龍之介の「蜜柑」などを取り上げ、近代文学の多様な読解可能性を受講者と共に探る。 （1 空井伸一／後半 7 回） 後半の古典文学では、勅撰和歌集を読んでいく。例えば勅撰和歌集である『古今和歌集』は、以降の和歌の形式や理論、および日本の文学・文化に大きな影響を与えた。中でもその「部立」という構成意識は季節感に与えた影響など文化規範として決定的な意味を持つ。授業では一首一首を精読し、「部立」の中での配列の意味について考察する。さらに古典文学を学ぶ上で必要となる基礎知識や、時代を隔てた人々のものの考え方・感じ方を調べる方法を身につけていく。	オムニバス方式
		日本語日本文学基礎演習 I B	この授業は日本語日本文学研究の基礎的な知識を紹介し、資料調査の方法、発表資料作成の技術、研究発表を通じて他者に自らの意見を伝えるスキルを習得するための導入となる演習である。 （オムニバス方式／全 15 回） （2 漆谷広樹／前半 8 回） 前半は、現代日本語について研究する。類義語の使い分けについて、どのような課題があるか、それをどのように掘り下げていくのかを学んでいく。例えば「考えにくい」と「考え難い」の違いについてどのような方法で解明していくのかについて学んでいく。 （4 和田明美／後半 7 回） 後半は、古典日本語の語彙や意味・表現について考察し、研究方法について学ぶ。例えば平安時代の形容詞「うつくし」と「らうたし」には、どのような相違が認められるのか、それぞれの語によって造詣される人物にはどのような特色があり、それぞれの語は歴史的にどのような推移をたどり変遷するのかについて取り上げる。	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育科目	演習科目	日本語日本文学基礎演習ⅠC	この授業は日本語日本文学研究の基礎的な知識を紹介し、資料調査の方法、発表資料作成の技術、研究発表を通じて他者に自らの意見を伝達するスキルを習得するための導入となる演習である。 (オムニバス方式／全15回) (3 平高史也／前半8回) 前半は、日本語の言語による表現を詳細に学ぶための基礎知識を身に付けていく。そのうえで表現にとってどのような方法が有効であるのか、実践を踏まえながら学んでいく。 (2 漆谷広樹／後半7回) 後半は、現代日本語について研究する。類義語の使い分けについて、どのような課題があるか、それをどのように掘り下げていくのかを学んでいく。例えば「考えにくい」と「考え難い」の違いについてどのような方法で解明していくのかについて学んでいく。	オムニバス方式
		日本語日本文学基礎演習ⅠD	この授業は日本語日本文学研究の基礎的な知識を紹介し、資料調査の方法、発表資料作成の技術、研究発表を通じて他者に自らの意見を伝達するスキルを習得するための導入となる演習である。 (オムニバス方式／全15回) (4 和田明美／前半8回) 前半は、古典日本語の語彙や意味・表現について考察し、研究方法について学ぶ。例えば平安時代の形容詞「うつくし」と「らうたし」には、どのような相違が認められるのか、それぞれの語によって造詣される人物にはどのような特色があり、それぞれの語は歴史的にどのような推移をたどり変遷するのかについて取り上げる。 (5 藤井貴志／後半7回) 後半の近代文学では、大正期を代表する短編といってよい梶井基次郎の「檸檬」や芥川龍之介の「蜜柑」などを取り上げ、近代文学の多様な読解可能性を受講者と共に探る。	オムニバス方式
		日本語日本文学基礎演習ⅠE	この授業は日本語日本文学研究の基礎的な知識を紹介し、資料調査の方法、発表資料作成の技術、研究発表を通じて他者に自らの意見を伝達するスキルを習得するための導入となる演習である。 (オムニバス方式／全15回) (1 空井伸一／前半8回) 前半の古典文学では、勅撰和歌集を読んでいく。例えば勅撰和歌集である『古今和歌集』は、以降の和歌の形式や理論、および日本の文学・文化に大きな影響を与えた。中でもその「部立」という構成意識は季節感に与えた影響など文化規範として決定的な意味を持つ。授業では一首一首を精読し、「部立」の中での配列の意味について考察する。さらに古典文学を学ぶ上で必要となる基礎知識や、時代を隔てた人々のものの考え方・感じ方を調べる方法を身に付けていく。 (3 平高史也／後半7回) 後半は、日本語の言語による表現を詳細に学ぶための基礎知識を身に付けていく。そのうえで表現にとってどのような方法が有効であるのか、実践を踏まえながら学んでいく。	オムニバス方式
		日本語日本文学基礎演習ⅡA	古代日本語研究の入門としての演習であり、研究の基礎的内容を目指す。豊かな表現力に富む平安時代の日本語の魅力とその特質を、『源氏物語』にスポットを当てて体系的・分析的に捉える。平安時代の人々の思考を支えた日本語の表現形式と意味、そこに託された人間の心や言語イメージにも注目しながら、古典日本語研究の基礎的方法について学ぶ。授業は原則として演習形式とするが、まずガイダンス及び導入に相当する講義を行う。その後、適宜レポート報告を課し、受講生相互の積極的・自発的ディスカッションによって、一層確かな研究となるよう深めていく。課題や疑問を解決するプロセスを重視しながら、多様な観点から着実な研究を試みる第一歩としたい。	
		日本語日本文学基礎演習ⅡB	現代日本語について基礎的な研究方法を学ぶ演習である。現代日本語の研究課題にはどのようなものがあるか。それを研究していくにはどのような方法があるのかについて、実践を踏まえながら学習していく。具体的には、現代日本語の類義語の使い分けについて、また最近新たに生まれている語オノマトペについてどのような法則性がありどのように産出されているのかといった点に注目する。どのような調査を行い、どのような発表をすれば良いのか、その方法を身に付け、次年度以降の学習へと結びつけていく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	演習科目	日本語日本文学基礎演習ⅡC	この授業では日本古典文学における怪異譚・奇譚を読んでいく。「怪しい話」はいつの時代でも人を惹きつけるところがあり、今の私たちにも親しみやすい。一方で、その時代ならではの想像力や興味関心を映し出すものでもある。一話一話を主立った注釈書を参照しつつ精読し、発表する作業を通じて、日本古典文学を学ぶ上で必要な基礎知識、作法を身につけていく。また、自分の調べたこと、考えたことを他人に分かってもらう論述の能力を養う。	
		日本語日本文学基礎演習ⅡD	日本近代文学の基礎的な研究方法を学ぶ演習である。芥川龍之介の短篇小説を毎週取り上げ、各自一回の研究発表を行う。近年、ジェイ・ルービンが編纂・英訳した『芥川龍之介短篇集』がペンギン・クラシック스에収録され、英語圏で広く読まれるなど、世界文学として芥川を再評価する試みが盛んである。この基礎演習では、そうした芥川文学の現代性を踏まえつつ各自が研究発表を行い、語りの多様性、日本の古典文学や世界文学からの影響などについて理解を深める。「羅生門」を筆頭に国語教科書に採用された芥川作品は少なくないが、教科書的な枠にとらわれない、多様な解釈の可能性を受講者と共に探っていくことを目指す。また、研究発表を通して、他者との応答の中で自らの論を説得的に伝えるための技術を身につける。	
		日本語日本文学基礎演習ⅡE	日本語表現学の基礎的な研究方法を学ぶ演習である。日本語表現学が扱う分野は多様であり、文字テキストもあれば、音声に基づく表現、また映像を介した表現もある。この授業では、日本語表現学が扱う領域の多様性を踏まえ、その研究方法にはどのようなものがあるのか、基礎的な知識と実践的なスキルを各自1回の研究発表を通して習得する。日本語表現学研究に必要な資料収集能力、発表資料作成の技術、プレゼンテーションを通して他者と意見を交換し、自らの論を練り上げる力を養いたい。	
		日本語日本文学演習Ⅰ	日本語日本文学研究を専門的に研究していく上での第一段階としての演習である。各自の関心に基づいて、日本語学（古典・近現代）、日本文学（古典・近現代）、日本語表現学のいずれかの分野について、演習形式で自らの思考を説得的に他者に伝達する力、論理的に解釈する力、調査結果のデータ等をもとに現象を掘り下げ説明する力などを身に付ける。先行研究の探し、それを咀嚼することからはじめ、演習参加者が実際に分析を行う際に必要となる研究方法とそれを可能とする研究ツールについて具体的に身に付けていく。またそれらをもとに発表資料を作成していく力を培っていく。	
		日本語日本文学演習Ⅱ	日本語日本文学を専門的に研究していく上で、発表資料の作成の方法や技術を体得し、発表として実践していくための演習である。また、他者の発表をききそれについて討論し、自らの思考を深めていくことを目標とする。先行研究や他者の意見に依存し過ぎることなく、独自の視点を有した論を構築していくことやこれまでに習得した研究の方法を駆使し、多様な学問領域や社会事象から新たな視点・論点を吸収し、豊かな研究発表につなげてもらいたい。各自1回の研究発表を行い、発表資料を作成する技術、演習形式で自らの思考を説得的に他者に伝達する力、論理的に説明する力を培っていく。	
		日本語日本文学演習Ⅲ	日本語日本文学で卒業論文を作成していく上で必要な知識を身に付け、実践していくための演習である。日本語学（古典・近現代）、日本文学（古典・近現代）、日本語表現学について卒業論文執筆を控えた学生がその構想を具体化し、研究のテーマを確定させる。序論・本論・結論・注という構造を備えた研究論文を執筆するために、研究者による論文や過去の優れた卒業論文を読むことを通じて必要な技法を具体的に吸収し、自らの論文作成の手掛かりとする。同時に日本語日本文学の研究について欠かすことのできない理論や方法論の探究も行う。そうした作業を踏まえた上で、卒論の構想についての個人発表へと移行する。他者と議論する中で自らの論の客観性と説得性を練り上げていくことがこの演習のテーマである。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	演習科目	日本語日本文学演習Ⅳ	日本語日本文学で卒業論文を作成していく上で必要な知識を身に付け、実践していくための演習である。これまで積み重ねてきた、日本語学（古典・近現代）、日本語学（古典・近現代）、日本語表現学の研究をさらに進め、卒業論文執筆を控えた学生がその構想を具体化し、他者との対話を通して説得力のある論文を完成する導きとなることを目指す。序論・本論・結論・注という構造を備えた研究論文を執筆するために、研究者による論文や過去の優れた卒業論文を読むことを通じて必要な技法を具体的に吸収し、自らの論文作成の手掛かりとする。同時に、日本語日本文学を研究する上で欠かすことのできない理論や方法論の探究も行う。そうした作業を踏まえた上で、各自の卒論の構想についての個人発表へと移行し、他者と討論を重ねる中で自らの論の客観性と説得性を練り上げることがこの演習のテーマである。	
	基幹科目	日本古典文学概論	日本古典文学に見る思想・文化・宗教・社会制度・生活・風俗・美意識に関わるトピックスを手がかりに、上代から近世まで各時代の作品を通観し、日本文学を専攻する人ならば押さえておきたい古典世界の知識・感受性について学ぶ。例えば「月」は古典の世界の時間・季節の基準となり、和歌の景物として詠まれ、あるいは悟りの境地の比喻ともされた。その一方、『古事記』においてはさして語られることのないマイナーな神にもなぞらえられ、『竹取物語』ではかぐや姫が帰還する冷やかな非人情の境地としても描かれている。このような「月」のイメージを具体的な作品を取り上げて考察し、通時的・横断的に見渡してゆく。	
		日本近代文学概論	この授業では、「私小説の問題」「物語論と世界像」「記憶と物語ること」という三つの柱を立て、それぞれ具体的な作品を取り上げながら日本近代文学の概説を行う。まず「私小説の問題」においては、日本で独自の発展を遂げた文学形式と言われる私小説というジャンルを再検討し、近代以降の文学テキストにおける「告白」や「私」という問題について考察する。次に「物語論と世界像」では、芥川龍之介の作品を中心に、人称やパースペクティブといった「語り」の問題について学び、多元的な語りによる世界像の変容について分析する。最後に「記憶と物語ること」においては、村上春樹を中心に現代文学の最前線において「記憶」や「物語」といったテーマが果たす役割を考える。三つの論点を通して日本近代文学の具体的なイメージを習得する。	
		日本語学概論	これまで日本語学の研究が明らかにしてきた日本語についての学問的な知識を習得する。日本語にはどのような特色があるのか。日本語はどのような言語であるのか。日本語の研究はどのような状況にあるのか。日本語を母国語とする場合、知っているようでも詳しくは知らないことや、なぜそのようなものであるのかといったことについて体系的な知識は持たない場合がある。ここでは音声・音韻、文字・表記、文章・文体等の各ジャンルについて基礎知識を習得していく。	
		日本語表現学概論	「表現」には言語によるものだけではなく、映像によるものや身体によるものなど様々な方法・手段がある。本講義では言語による表現、特に日本語による表現について、その目的およびどのような工夫があるのかについて具体的に学び、これまでどのような様式が培われてきたのか、現状はどのようなものであるのかについて学修する。日本語による表現の構造を詳しく明らかにしていくとともに、表現について知識を体系的に習得していく。	
	展開科目	日本古典文学史	この講義では、日本古典文学史を代表する作品の特徴的な一節を、当時の時代背景を踏まえて読んでゆく。それにより、文学の歴史的な背景、流れを見ていく。また、そうした作品が「古典」、すなわち、歴史的に意義・価値を持つものとみなされるようになった理由についても考察する。また、近年の研究によって従来の見解や評価が修正された例などについても紹介し、その意義や問題点についても考察を加える。こうした考察を通じて、日本古典文学史の概要を、与えられたものを鵜呑みにするのではなく、批判的観点をもって自覚的・主体的に把握できるようにする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育科目	展開 科目	日本近代文学史	明治から昭和にかけて書かれた〈不安の文学〉について多角的に考察する。1927（昭和2）年、芥川龍之介は〈ぼんやりした不安〉と言い遺して自殺した。「芥川の死から昭和文学が始まる」とは多くの文学史が教えるところである。この講義では日露戦争後から1920～30年代の文学を覆った「煩悶」「憂鬱」「倦怠」といった気分を通時的に辿り、それが〈ぼんやりした不安〉へと凝集していく過程を分析する。さらにその〈不安〉は戦争を経て、どのように現代へと繋がっていくのか。〈不安〉というテーマを通じて近現代の文学作品とその時代背景を読み解き、日本の近代と文学がいかなるものであったのか、受講者と共に探っていきたい。	
		日本語史	日本語は、時の流れとともに様々に変化してきた。それは文字・音韻・文法・語彙・文章文体など各部門をめぐって起こる現象である。ここでは各部門についてひとまず概観し、次に最も大きな変化が見られた文法のジャンルで特に用言や助動詞を中心とした変化について、その要因・過程・結果を考えていく。日本語の動詞や助動詞は、どのように変化したのか。係り結びはなぜ消滅したのか。古典語が現代語に変化することとは、日本語がどうなっていくことだったのかについて注目し、詳しく見ていく。	
		日本古典文学講読Ⅰ	この授業では江戸時代に刊行された「怪談」を輪読形式で読んでゆく。江戸時代における特徴的な文学の受容のあり方として、作品が出版され商品として流通したということが上げられる。それにより、以前の時代ならば悪行為に対する宗教的な報いや、人間を超えた不可解な存在の為すこととして信じられ語られてきた「怪異」が、読み物として享受されるようになる。それは現在の私たちが対価を支払ってホラー作品や体験を娯楽として「消費」するあり方に近いところがある。具体的な例として、そのような怪異の受け止め方の起こりともいえる作品、仮名草子『曾呂利物語』を取り上げ、当時の人々の興味関心の置きどころ、想像力、話の作り上げ方について考えていく。また、影印を見ることを通じて古典当時の表記（くずし字）の一端について素養を培ってもらいたい。	
		日本近代文学講読Ⅰ	〈変身〉を描いた日本近代文学を取り上げる。中島敦の「山月記」をはじめ、日本近代文学には〈変身〉をモチーフとした作品の系譜が存在する。花田清輝は「変形譚」の中で「いかにして人間が人間以外の動物や植物や鉱物に転身することができるのか。或いは又、いかにして動物や植物や鉱物になった人間が、再び元の人間の姿に復帰することができるのか」という問いを立て、〈人間中心主義〉という近代の課題を超克するべく〈変身譚〉の意味を探っている。この授業では、カフカの「変身」や花田からの強い影響のもとに数々の〈変身譚〉を描いた安部公房を中心に様々なテキストを読み解き、日本近代文学における〈変身〉のテーマについて多角的に考察する。	
		日本語学講読Ⅰ	古代日本語から近代日本語へと推移する時期である中世後期の言語状況を知る資料として、キリシタン資料がある。これは17世紀初頭にポルトガル人などの宣教師が、日本語の学習や研究をした際に用いた、主にローマ字書きの資料である。ここでは、『天草版 伊曾保物語』などの資料を読み、日本語が推移する時期の状況を捉える。また、辞書の使い方や、用例が何を意味するのかなどについても身に付け、日本語の研究の方法も身に付けていく。	
		日本古典文学講読Ⅱ	この授業では江戸時代の中頃に刊行された上田秋成（剪枝畸人）作『雨月物語』をみなさんと一緒に読んでゆく。『雨月物語』は数多くの和漢の古典作品から縦横に取材・引用しつつ、なおかつそれまでにない独自の世界を作りあげた高度に知的な読み物であり、その一方、「今古怪談（＝怪談）」とも銘打たれるように、誰が読んでも分かる「恐怖」の読み物でもある。分かりやすいけれども、深く読もうとすれば底の知れない奥行きがあり、そのため、近世小説の中で最も詳しく論じられてきた作品のひとつとなった。そうした先行作品や典拠、研究史をわきまえながら、「自分ならばどう読むか」を突き詰めて考えてみたい。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	展開科目	日本近代文学講読Ⅱ	「文学的文化論——詩人・宮沢賢治のテクストを読む」詩人・宮沢賢治の『春と修羅』その他の詩歌や、手紙、ノート、メモ、広告文案、彼が生前刊行した唯一の童話集である『注文の多い料理店』などを読む。『春と修羅』と『注文の多い料理店』は、いずれも1924年に自費出版された、賢治の同時代へのまなざしが至る所にこめられた作品集である。私たちは賢治自身が生前世に問うた数少ない作品集のみならず、書簡、メモ、サラリーマンとしての広告文案その他、賢治の「書いたもの」を一括して「テクスト」と呼び、同時代の文学作品・社会状況や、民俗学の成果をも参照しつつ、精緻に読みすすめてゆこう。	
		日本語学講読Ⅱ	『万葉集』は現存最古の日本の歌集であるとともに恋の歌集でもある。古代的な自然観や愛（ヒューマニティー）に根差した雑歌・相聞・挽歌の表現を読み、古代日本語と日本文化への理解を深める。また、現在のミュージックや現代歌謡にも通じる日本人の「歌」の源流に触れ、「歌う」行為の歴史や変遷を明らかにする。特に、古代日本語の音声・アクセントの復元に基づき、古代日本語で恋の歌を実際に歌うことを試みる。このことを通じて、古代日本語の音声・アクセント・意味・表現への関心を高め、リアルな体験にもとづく古代日本語の考察・読解を目指す。	
		日本古典文学特殊講義	日本文学の中核を担ってきた和歌について、歴史的に概観しつつ、わずか三十一文字の中に詠み込まれた折々の季節感や、喜怒哀楽といった美意識や感情表現を味読する。授業では、まず和歌文学の概説について説明し、万葉集、古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集、後拾遺和歌集、金葉和歌集、千載和歌集、新古今和歌集や、物語の和歌、十三代集の和歌などを授業で取り上げる。また、また、仮名の読解、資料の基本的な調査も授業の中で扱う。	
		日本近代文学特殊講義	作品を読む者の数だけ解釈は多様であるなどという誤解も多い近代文学研究という領域において、理論的に読むことの意味はどこにあるのだろうか。その理論自体が孕む歴史性や限界を意識しつつ、「読むこと」の可能性を受講者と共に探っていくことがこの講義のテーマである。テキスト分析の方法は多数あり、決して固定的なものではない。とはいえ、まずは理解しておかなければならない幾つかの理論的枠組みが存在することも確かである。この講義では具体的な分析対象として夏目漱石の『こころ』を取り上げる。毎週異なる文学理論によって解釈・分析を行い、文学理論と解釈の多様性について理解を深める。	
		日本語学特殊講義	意味を持つひとまとまりの単位である語は、ことばを成り立たせる基本的な要素である。この、語のまとまりを語彙という。ことばに興味があれば語彙について学ぶことは重要な課題の一つである。語彙についての研究課題は様々で、この講義では、語の意味や類義語について、色彩語彙、身体語彙、感情語彙などについて、またことばの変化やことばと社会等さまざまな角度から語彙の世界を探訪し、より専門的な角度から日本語への興味や探究心を深めることを目指す。	
		日本語コミュニケーション特殊講義	ここでは日本語表現の諸相について学ぶ。日本語による表現というとはまず文字による表現が連想されると思うが、伝達手段には文字だけでなく音声もある。音声による表現は近年「談話」の研究として文章研究とともに広く行われている。ここでは文字による表現、音声による表現がこれまでどのように行われてきたのか、また今後どのように展開していくのかについて、具体的な研究例を取り上げながら日本語表現に関する理解を深めていく。	
		日本語文法論	『万葉集』や『古今集』『古今和歌六帖』等の歌集、愛知・静岡・岐阜・三重等の各県に関する平安時代の古典文学作品を紹介しながら、古典の助動詞の意味と用法についての講義を行う。特に、古典文学作品を読む上に役立つ文法の授業をめざし、言葉の法則・意味・用法を明確にとらえることを目標とする。また、現代日本語との相違にも着目しながら助動詞の意味用法を平易に解説する。現代日本語と古典語をリンクさせながら平易に古典読解に必要な文法の知識について学習する。	
	関連科目	レトリック研究	レトリックという語は、それが用いられる文脈や状況に応じて様々な意味を持ち得る。ここでは修辞学という捉え方をする。文章表現において、修辞はその文章から受ける印象や感動などに深く関わっている。ここでは、そうした修辞について単なるテクニックを身に付けるだけではなく、学問的知識を身に付けていく。これまでにどのような知見が積み重ねられてきたのか。表現形式と表現効果の関係をどのように解明していけば良いのかについて学習していく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	関連科目	古典文学資料読解	日本古典文学資料（写本・版本などの和本）の実物に触れる機会の少ない現在の状況に鑑み、できるだけ実物による理解・確認を伴った形で和本に関する基礎的知識、及びその扱い方を養う。また、そこに現代とは違う形式で記される文字について、それを読解するための基礎知識、及び初歩的読解力を養う。講義では、近世までの書誌学的作業の概略を説明し、まず和紙に関する内容を取り上げ、次に書籍の装訂の種類と用語・方法と歴史について取り上げる。最後に、日本における刊本の歴史/版本を読みたい。	
		日本近代文学Ⅰ	昭和初期の有力紙雑誌『四季』において活躍した丸山薫は、豊橋市及び愛知大学にも縁の深い詩人である。〈物象詩〉の詩人としてその名を詩史に刻む丸山は、大正後期から昭和初期にかけて西洋から移入された新しい文学の主張に鋭敏に反応し、それを自身の詩や掌篇小説等の芸術作品の中に取り入れている。それは新感覚派からモダニズム文学運動へと展開する文学史にも合致するものであった。丸山薫という芸術家の個性が最も輝いていた戦前のモダニズム影響下の作品を中心に、同時代の流れを踏まえつつ、感性豊かに読み解く。	隔年
		日本近代文学Ⅱ	小説と詩との本質的な相違は何か。日本近代が詩史に求めた言語観や文化観、あるいは、作品に込められた心性の問題を、その時代や社会の様相と交えて考察する。韻文に対する近代と前近代との価値観の相違について解説し、明治、大正期の作品に触れる。学生個々が、日本近代に於ける著名な詩人やその作品の特質を理解し、さらには、その作品から透けて見える時代相や文化環境をも把握し、教養を高められる授業内容としたい。CDや画集等、他の芸術ジャンルをも交えた授業を行うこともある。	隔年
		日本語教育研究Ⅰ	日本語を外国語として習得する際にどのような問題があるのか。日本語を教えようとするときにはどのような点に注意すればよいのか。日本人ならば、誰でも簡単に日本語についての疑問に答えられると考えがちであるが、日本語には母国語話者であるからこそ、あまり考えたことがない、実はあまり理解していない、日本語のルールがある。そのルールを知り、学習者が持つ疑問に対してどのように答えていけばよいのか習得していく。	隔年
		日本語教育研究Ⅱ	日本語を母語としない人々と、日本の中でよい関係を持つためには、ことばの問題を解決する必要がある。日本語母語話者が普段用いていることばは、日本語を母語としない人々にとって、難解である場合がある。〈やさしい日本語〉が持つ意義を知り、どのような方法をとれば〈やさしい日本語〉で伝達できるのかについて考えていく。学習者にとって具体的にどのような日本語が難しく、どのように言い換えればよいのか習得していく。	隔年
		漢文学Ⅰ	漢文訓読とは、中国の古典の文章を日本語の語順に合わせて読もうとする試みで、日本の古典文法に基づいた一種の翻訳方法である。その方法は、時代や流派によってさまざまな変遷が見られるが、この科目で扱うのは、主に江戸時代中頃に確立した訓読法である。というのも、江戸中期に確立した簡素化された訓読法こそが、現代日本語との結びつきという点では関係が深く、その成立に大きな影響を与えたとされているからである。「国語」の中に「漢文」が含まれている所以も、この点にある。この科目では、虚詞（接続詞・副詞・助字など）にこだわって、一字一字をおろそかにすることなく、漢文を正確に読み解く力を養うことを目標とする。「漢文学Ⅰ」では、まず訓点を施した文章を読んでいくことから始め、徐々に訓点を減らしてゆきたい。	
		漢文学Ⅱ	漢文訓読とは、中国の古典の文章を日本語の語順に合わせて読もうとする試みで、日本の古典文法に基づいた一種の翻訳方法である。その方法は、時代や流派によってさまざまな変遷が見られるが、この科目で扱うのは、主に江戸時代中頃に確立した訓読法である。というのも、江戸中期に確立した簡素化された訓読法こそが、現代日本語との結びつきという点では関係が深く、その成立に大きな影響を与えたとされているからである。「国語」の中に「漢文」が含まれている所以も、この点にある。この科目では、虚詞（接続詞・副詞・助字など）にこだわって、一字一字をおろそかにすることなく、漢文を正確に読み解く力を養うことを目標とする。「漢文学Ⅱ」では、訓点を減らした文章に徐々に慣れてゆき、最終的には白文を読み取り、訓読に直せるようにしたい。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	関連科目	外国語としての日本語	日本語を教えるというのはどのようなことだろうか。母語話者であれば誰でも容易に日本が教えられる訳ではない。今後は日本国内においても、何らかの形で日本語を母語としない人々と関わっていくことが想定される。そこで、日本語を教える際にはどのような方法があり、どのような点に注意すべきか、これまでの日本語教育が行ってきた方法を知り、今後それをどのように体得していけばよいのか、学問的な方法を身に付けていく。	
		教育方法論	教育目的を達成するためには、適切な教育方法・技術を欠くことはできない。本講義では、教育方法・教授法の歴史や理念、授業論、教育評価論等の観点から、実際に授業実践を行うために必要となる教育方法・技術についての基礎的知識を獲得し、教育方法の原理を理解するとともに、学校教育における授業の編成方法、情報機器（ICT）を活用した指導法を身につけることを目指す。また、映像・文献資料および実際の授業の分析を通して、将来教師になった際、子どもの学びをどう捉え、どう支援していくか、について理解を深めていく。	
		国語科教育法	中学校国語科および高等学校国語科における基本的な授業の方法を身につける。その際、本科目では学習指導要領において国語科に求められているものを理解し、それを授業の中で実際にどのように展開していくかを理論的に考えるとともに、授業を行うために必要なことを実践的に学ぶ。具体的には、学習指導要領の内容、学習指導案作成のポイント、さまざまな授業方法とその目標・評価方法、情報機器や教具の活用について講義する。そして、実際の国語科の教材研究を行いながら学習指導案を作成し、模擬授業を行う。さらに、模擬授業の改善や授業研究会のあり方について考え、総合的に国語科の授業力を育成する。	
		国語科指導法Ⅰ	「国語科教育法」での学習内容を発展させ、中学校国語科および高等学校国語科の教科指導に必要な素養を身につける。本科目では、中学校・高等学校教材としての随想的文章、論理的文章、古文散文、小説、詩、短歌・俳句、古文韻文、漢文それぞれの教材研究を基にした受講生による模擬授業を中心として、その改善をめざす研究協議を行う。研究協議では、教材研究のあり方、発問、番所計画、情報機器の活用を含んだ教具の利用、評価の仕方について実践的に学ぶとともに、各回において「話すこと・聞くこと」「書くこと」の指導のあり方についても考察を深めていく。	
		国語科指導法Ⅱ	「国語科教育法」および「国語科指導法Ⅰ」での学習内容をさらに発展させ、中学校国語科および高等学校国語科の教科指導に必要な発展的素養を身につける。本科目では、生徒の主体的な活動を取り入れた「主体的・対話的で深い学び」を意識した教科指導観を身につけることを目的としながら、教材研究、発問、板書計画、情報機器の活用を含んだ教具の利用、評価の仕方について一層考察を深める。具体的には、生徒の主体的な活動を取り入れた中学校および高等学校の説明的文章、古典教材、文学的文章、および詩歌を教材とした模擬授業実践を行い、これについての研究討議を通じた学習を行う。	
	他学部科目	GIS 概論	GIS（Geographic Information System:地理情報システム）は、地理学や情報技術、地球科学、社会科学、生態学、計測工学など、様々な分野に関わる学際的なシステムである。地理情報とは何か、GIS の概念や歴史、GIS をとりまく現状、GIS の構成要素や機能などの基礎知識を学ぶ。また、自治体や民間企業、研究教育機関など諸分野における GIS の活用事例を紹介し、さまざまな学問分野や地域政策における GIS の活用の方向性を学習する。「地理空間情報高度活用社会」実現に向けて、それぞれの分野や地域において今後どのように GIS を利活用していくか考えられるようになることを最終目標とする。	
		まちづくりとデータ分析	地域の実情に基づきまちづくりを行うには、データの収集や分析が必要不可欠である。本授業では、まちづくりに欠かせないデータとは何か、何故必要なのか、いかに収集し活用するかについての方法や技術を習得する。まず、まちづくりに必要なデータを体系的に確認する。次に、統計資料などの既存データの探し方や、アンケートやヒアリングなど現地調査によるオリジナルデータの集め方の知識を身につける。そして、収集したデータの種類に即した統計処理・分析を行うことで、得られた結果をどのようにまちづくりに生かしていくかについて考える。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育科目	他学部 科目	地域資源論	まちづくりや地域づくりで重要なことは、ハード・ソフト両面の地域資源をいかに発掘し、利活用、管理制御していくかである。空間や場所を扱う学問である地理学の視点に立ち、地域資源とまちづくり・地域づくりとを結びつけるための理念と実情について理解する。地域の風土性を知るとともに、風土性に基づき創られる地域資源の把握方法（認識・点検評価も含む）や、風土産業・地域ブランド化に代表されるような地域資源の有効活用の手法・仕組みを学ぶ。	
		英米の地域と文化	2000 年余の長い歴史を誇り、すばらしい文化を有し、観光大国と言われるイギリスを中心に英米の文化と歴史について概観する。文化の手始めとして大英帝国の歴史を辿りながら、その間にどのような産業や文化が芽生えたかを考察する。その理解の上で、現在のイギリス各地の観光ポイントを考察する。また、アメリカについても、1600 年以降の欧米からの移民と 19 世紀における開拓の歴史を概観し、現在のアメリカがどのような理念のもとに建国されたかを理解するとともに、東部、中西部、西部の観光について考察する。学生の自主的な授業への参加を促すため種々のアクティブ・ラーニングを取り入れ、プレゼンテーション力、企画力、簡単な英語力も身につける。	
		多文化共生論	文化の概念や日本人のコミュニケーションの特質から入り、「日本人らしさと自分」を経験的に分析する。また「〇〇人論」などのステレオタイプのイメージを分析し、ステレオタイプや偏見が起こる原因について探る。さらに、異文化接触によってどのような相互作用がもたらされるか、言語や心理面での軋轢・摩擦・受容のモデルから考察する。最終的に、価値観の相違を考えながら多文化共生に向けて創造的な地域づくりとは何かを探究する。学生の自主的な授業への参加を促すため種々のアクティブ・ラーニングを取り入れ、プレゼンテーション力、批判的思考力、分析力を身につける。	

学校法人愛知大学 設置認可等に関わる組織の移行表

令和2年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員		令和3年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
愛知大学					愛知大学				
文学部 人文社会学科	290	-	1,160	→	文学部 人文社会学科	172	-	688	定員変更(△118)
文学部 心理学科	55	-	220		文学部 心理学科	55	-	220	
					文学部 <u>歴史地理学科</u>	70	-	280	学科の設置(届出)
					文学部 <u>日本語日本文学科</u>	48	-	192	学科の設置(届出)
経済学部 経済学科	330	-	1,320		経済学部 経済学科	330	-	1,320	
国際コミュニケーション学部 英語学科	115	-	460		国際コミュニケーション学部 英語学科	115	-	460	
国際コミュニケーション学部 国際教養学科	115	-	460		国際コミュニケーション学部 国際教養学科	115	-	460	
法学部 法学科	315	-	1,260		法学部 法学科	315	-	1,260	
経営学部 経営学科	250	-	1,000		経営学部 経営学科	250	-	1,000	
経営学部 会計ファイナンス学科	125	-	500		経営学部 会計ファイナンス学科	125	-	500	
現代中国学部 現代中国学科	180	-	720		現代中国学部 現代中国学科	180	-	720	
地域政策学部 地域政策学科	220	-	880		地域政策学部 地域政策学科	220	-	880	
計	1,995	-	7,980		計	1,995	-	7,980	
愛知大学大学院					愛知大学大学院				
法学研究科公法学専攻(D)	3	-	9	→	法学研究科公法学専攻(D)	3	-	9	
法学研究科私法学専攻(D)	5	-	15		法学研究科私法学専攻(D)	5	-	15	
経済学研究科経済学専攻(M)	15	-	30		経済学研究科経済学専攻(M)	15	-	30	
経済学研究科経済学専攻(D)	5	-	15		経済学研究科経済学専攻(D)	5	-	15	
経営学研究科経営学専攻(M)	15	-	30		経営学研究科経営学専攻(M)	15	-	30	
経営学研究科経営学専攻(D)	5	-	15		経営学研究科経営学専攻(D)	5	-	15	
中国研究科中国研究専攻(M)	15	-	30		中国研究科中国研究専攻(M)	15	-	30	
中国研究科中国研究専攻(D)	15	-	45		中国研究科中国研究専攻(D)	15	-	45	
文学研究科日本文化専攻(M)	10	-	20		文学研究科日本文化専攻(M)	10	-	20	
文学研究科日本文化専攻(D)	2	-	6		文学研究科日本文化専攻(D)	2	-	6	
文学研究科地域社会システム専攻(M)	10	-	20		文学研究科地域社会システム専攻(M)	10	-	20	
文学研究科地域社会システム専攻(D)	2	-	6		文学研究科地域社会システム専攻(D)	2	-	6	
文学研究科欧米文化専攻(M)	10	-	20		文学研究科欧米文化専攻(M)	10	-	20	
文学研究科欧米文化専攻(D)	2	-	6		文学研究科欧米文化専攻(D)	2	-	6	
国際コミュニケーション研究科 国際コミュニケーション専攻(M)	15	-	30		国際コミュニケーション研究科 国際コミュニケーション専攻(M)	15	-	30	
法務研究科法務専攻(P)	20	-	60		法務研究科法務専攻(P)	20	-	60	
計	149	-	357		計	149	-	357	
愛知大学短期大学部					愛知大学短期大学部				
ライフデザイン総合学科	100	-	200	→	ライフデザイン総合学科	100	-	200	
計	100	-	200		計	100	-	200	